女學雜誌

一冊六錢

各土曜日發兌

第百八拾四號

當府內無郵稅

郵稅五厘

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 184. October 26th, 1889.

第百八十四號目錄

EDITORIAL NOTES:—The Dynamite. The Woman's Outlook.

LEADING ARTICLES:—Sincerity in Literature. How Girls should read Books.

CRITICAL NOTES:—John Bright. Novels of Note at the Present Day.

MISCELLANEOUS:—Two Methods of Advocating Woman's Rights: Marriage and "Woman Question." Cromwell's Last Prayer. Burke's Best Part. The Advantage of Dancing. A tear—nothing but a tear. Five Poets in the *Haikai* Line. Critics and Writers. The Story of a Chemist. The Beauty's Toilet. King George and the Gatekeeper. Arabella Johnson.

NOVEL:—"Sumire" (Wakamatsu Shizu.)

OPEN LETTERS:—

CONTRIBUTED ARTICLES:—

NOTES ON THE NEWEST ISSUES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

SINCE OUR LAST ISSUE.

社說　ダイナマイト○女性亦外事に注意すべし

論說　眞情より出でたる文字○女學生讀書戒

批評　如溫武雷士傳○近日出色の小說

雜錄　女權伸張策表裏○婚姻さ女權論○クロムエル臨終の祈禱○ボルクの最長所○踏舞の効能○涙——涙のみ○俳諧壇の五子○批評家さ著作家○化學者の無慾○美人化粧に苦む○田夫及びヂョルヂ王○アラベラ、ジョンソン夫人の傳(田村武二)

小說　すみれ(花の形容)

寄書　十三夜の月(有馬強太郎)○爐の効用

開書　忘るゝ勿れ女學記者(櫻田秀)○問答

時事　同胞諸兄姉を和む○沈思三省○目的さ手段○泥棒及暗殺者○暗黑に入れ○兇徒の死軆○嗚呼幾多の人才○大隈伯北堂○大隈伯夫人○女子青年會○事小なるに似たれども甚だ吾邦の軆面に害あり○上野馬見所に注目せよ○油畫さ日本人○其他八件

女報　東京慈惠醫院幹事○女子の建白○成立學舍女子部○女子職業學校○伊藤伯爵夫人○其他五件

Women in Japan.

(1) *"The Ladies' Hakuhyō Association" has just sent a letter to the Queen of England entreating H.M. to sanction the Treaty Revision. The woman who went out against the enemy with a poker could at least show to which side she belonged.*

(2) *The same Association has also sent a letter to the General Conference of the Kwaishintō (Liberal Party) in the capital, advising them to set all the political assemblies an example by abolishing the use of intoxicating drinks and excluding singing-girls who are usually called upon to assist in all convivial occasions, from all their meetings.*

(3) *The amount accruing from the sale of tickets for the musical entertainment got up for the benefit of the sufferers from the flood is 266 yen 17 sen and 5 rin. The expended amount, 55 yen 57 sen 5 rin, being paid out from it, the remainder will be sent along with the other contributions through "The Woman's Magazine Office."*

(4) *Another industrial school for girls is to be opened and conducted by 4 Christian ladies in Shiba. The more's the better.*

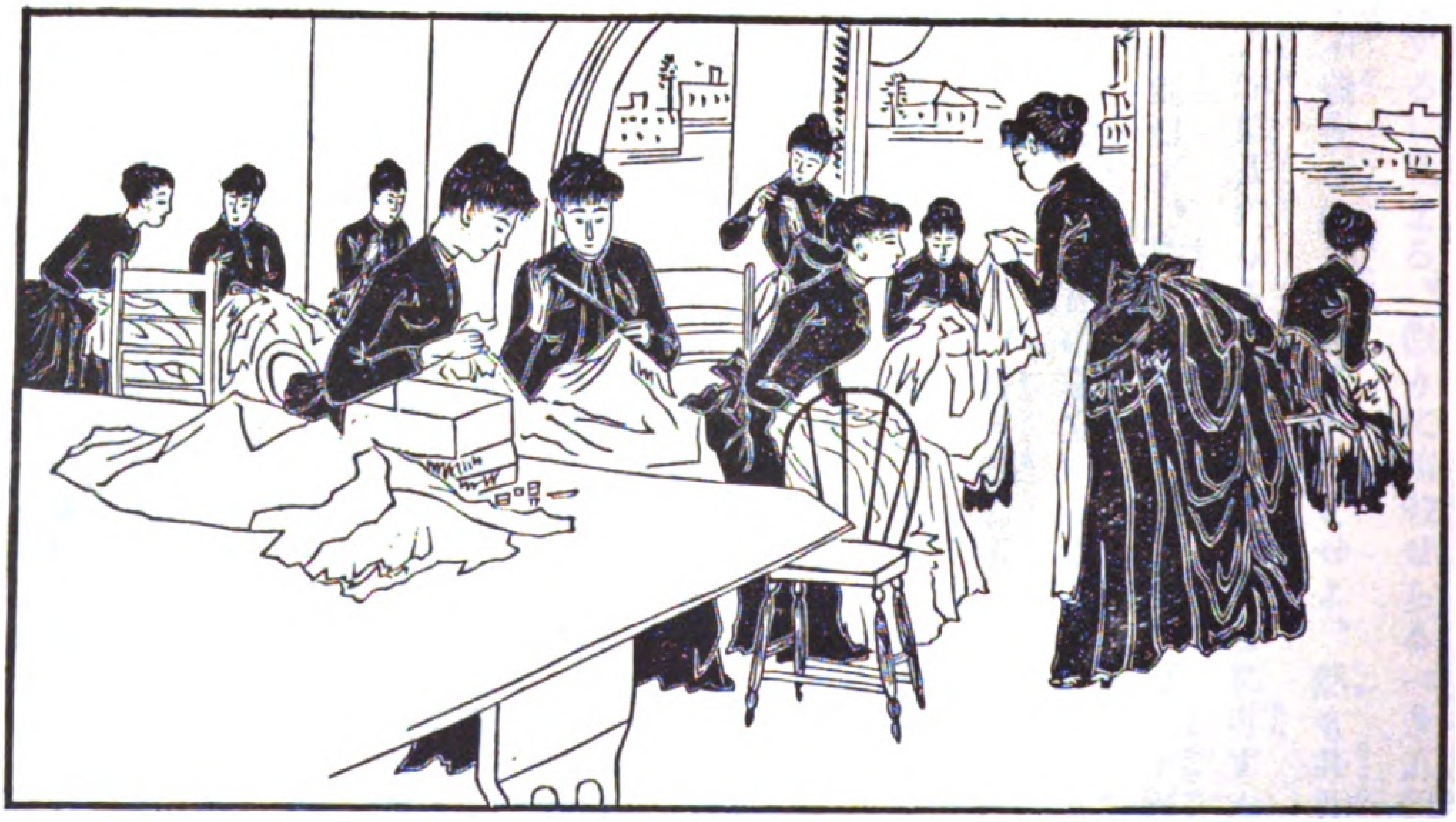
(5) *Kagoshima which has been the slowest city in Japan to introduce Western civilization is at last to open a girl's school for teaching English, and it is to be conducted by Mrs. Taneda, the wife of the late Gen. Taneda who is to engage two teachers from America.*

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

米國婦人基督教青年會館

同館內教場之一 裁縫教場



Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百八十四號
明治二十二年十月廿六日發兌

社說

○ダイナマイト

嗚呼正義よ、何如に多くの惡事は汝ぢの名に於て暴行せらるゝ哉、維新以來二十余年、文明の澤洽ねく國中に流布せりと云へり、而して蠻野邪劣なる氣象の絕たざる何ぞ如此きは何んぞや、大久保內務卿の紀尾井坂に刺るゝや、民心狂亂の后ち暫らくにして直ちに刺客の非正なるとを確認したり、思へらく之より亦た暗殺の事ある可らずと、然るに后ち四年を經ずして亦た板垣君を傷つくるものあり、本年憲法の發布せらるゝ當日に於て彼の剛正廉直なる森文部大臣をすら刺殺するものありき、然るに此等の變ある每に人心いよ〳〵痛しみ、最早や暗殺を以て正義を主張せんとする如き蠻風あるまじと思ひつるに、今日歐米諸外國と談判最中なる、日本三千九百万民を代表する唯一の外交官たる、我が立憲帝國の光榮を海外万邦に射出する最高の開窓たる、外務大臣大隈重信君は亦た要擊せられたる也。

嗚呼正大の目的は唯だ正大の手段を以て實行するとを得べし、彼の權謀術數は權謀術數を生むに止まり、凶惡なる方法は凶惡なる結果を生ずるに止まる、假りに暗殺せらるべき人物にして眞とに不正不義なるの人物にてありとせよ、然も共此の不正不義なるの人物は正義なる刑罰を以て科するに非ずんば其の罪を滅すると能はず、若し暴を以て暴に報ひば天下何の日にか暴を消さん、今日は憲法の確立するあり、輿論の監視するあり、法律の明定するあり、吾人若し不正不義の徒を退ぞけんと欲せば正々堂々たる手段幾千もあり、何を苦んで蠻野壓制の時代に傚らひ、無政府無自由に存する亂暴なる手段に賴るとを要せん。

畢竟是れ日本の輿論の未だ全く淸純ならざるが故也、嗚呼輿論よ、輿論よ、汝ぢ宜しく其良心を發揮すべし、苟くも不正なる手段によりて事を爲さんとするものあらば、假令ひ其結果の何如に僥倖を生ずるにもせよ、又假令ひ其意思の甚はだ憐れむべき者あるにもせよ、宜しく斷じて皆な之を退ぞくべし、如此き薄弱者を恐れむは天下幾多の義士を殺ろす者也、如此き不心得者を寬待するは世上倍多の覺悟あるものを酷待するなり、彼の不義を爲して自殺する何の褒むべき所ろあらんや、不正を遂げて香花を奠せらるゝ何の榮えあらんや、島

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

田一郎も、西野文太郎も、來島恒喜も、彼のイスカリヲテのユダと共に常に永久永世罵しらるべきもの也。日本の社會は不幸にして尚ほ如此き兇兒を出せり、輿論よ汝ち今ま起り立つて汝ちが總體は決して如此きものにあらざるを示せ、之れ汝ちに殘れる唯だ一つの辨解法なり、汝ち決して暗殺者の性行に就て聞くと勿れ、暗殺者の憐れむべきに付て泣くとなかれ、暗殺者の送葬に就て優假すると勿れ、如此き兇兒は宜しく暗黒中に沒すべし、其の姓名は只だ嫌惡厭憎の記臆中に窮りなく葬むらるべし。

○女性亦外事に注意すべし

牝鷄の時を告るは不吉の兆なり、婦女子が喙を外事に容るゝは一家亡滅の元なりとは、支那三千年の昔しより我國に傳授したる金言にして、古往今來敢て言ひ爭そへる者あるなし。左れば細君をして外向の事に關係せしめざれば夫れにて男らしきとと思ひ、婦人をして政治を談ぜしめざれば夫にて天下太平ありと思へり、昔し一奉行あり、其役を引受るに當つて先づ細君に相談し、今后細君が決して外事に口を入れぬとの盟約を得て始めて之を引受たり、而して其出掛に袴が曲れりと細君の注意するや否や直ちに取つて押へ、既に何事も言はぬと云ひしに非ずやと極め附けたる由傳ふる者あり、代々の史家切りに之を賞贊し此の一事を以て既に明奉行の德を圓滿せりと爲す。夫れ細君の外事に關係す可らざるは良人の袴の着け方にすら掛念す可らざる程にてある乎、然らば細君が當に全身全力を盡すべきの領分は果して何處にありや、曰く臺所元にあり、縫針にあり、洗濯物にあり、客あるとも中々顔を出す勿れし、主人留守中に外人に接する勿れ、たゞ肴屋に談判すると、米屋にお拂ひを爲ると、薪屋に注文するとは此の限りにあらず、但し夫等にても決して永居せしめ久しく應接す可らずと。支那人は女性の職分は閨門內に限ると云ひ、日本人は妻は內房、家內、奧方となり良人獨り外君と爲るべしと云ひ、西洋人は男は外に於て働らくの王たれ女はホームに於て勤むるの女王たれと云へり、何れも女性の本領は內にして外にあらずと云ふなり、啻に舊弊主義の左樣に言ふのみならず、文明開明の主義に於ても亦左樣に言ふなり、吾人も亦た他意なく之に同ずるとを猶豫せざるべし、たとひ女は決して外事を言ふ可らずと迄に命令せざるとも、女に最とも適したるとは家事

なり、內事なり、ホームの事なりと、斷言すべし、故に女が外界に於ける大豪傑たらんよりも、內界に於ける聖天使たれよとは、數年一日の如くに祈禱したる所ろの願望にして、亦た后年永久に希願せんと欲するの理想にてある也。

夫れ女性の專門はホームに在り、彼は先づ家內に於けるの聖天使となりて其の務めを盡くすべしと云ふは、是れ啻に吾人が切望するのみならず、日本人總躰に之を希望すべく、啻に日本人が希望するのみならず、西洋人も支那人も孔子もジヨンデアークも同樣に願望すべし。但だ何如にして家內に於けるの聖天使たらんかと言ふに至り、初めて多少の異論あるべし、今日の家には椅子テーブルなどあり、今日の食事には西洋料理をも用ゆ、今日の交際には歐米風も混じ居れり、既に家具も、食事も、交際も昔しとは大ひに變わりたる時、此家內の奉行たる細君のみは矢張り三皇伏羲時代、下りて元祿安政天保時代の姿たにて支配すべきや否やと云ふこと、是れ舊弊主義と新主義との少さか同意しがたき所ろ也。

成程女は家にありてホームを美くしく調ふるものにてあるべし、然し此の家と云ひホームと云ふものは、只だ犬か猫の如きものが食らひ、起き、寢ね、而して意味もなく出入往復して暮らす所ろには非ず、茲には人間と云へるものが快よく住居せんと欲するとこにて、然も人間中彼の男子と云へる常に外に働らきて夜に入り勞々として歸宅するものが大ひに慰さめを要するの場所なることを知らざる可らず、然らば啻に食物を甘まくし、飾り付けを美しくし、寢臺を快ちよくすることの必要あるのみならず、併せて其の感情を樂しくせしむることを必要とし、特に其の外に於て受けたる苦しみあらば之を洗ふが如くに忘却せしめ、若し又外に於て受けたる樂しみあらば之を一層強く喜ばしむることを必要とする也。若し一家の効能と云ふものにしてたゞ衣食住を供ふる丈の者ならしめば其は下宿屋にても得らるべし、若し飾り付け持てなし風等の快よきが爲めのみならば其は料理屋にても得らるべし、然れども一家なる者の尤も尊とき効能は決して如此き事にあらず、實に世上の何如なる所ろに於ても得られまじき樂感快感を茲に得能ふが爲めにして、苦痛は此に於て除かれ、快樂は此に於て増され、煩邪わだかまり覆ふの浮世に於て唯一の喜ばしき好天地を此に於て備へられ能ふが爲めにてあるべし。

凡そ苦痛は之を我が愛するものに語りて其の同情を受れば殆んど忘るゝに至るもの也、而して快樂は之を語りて人の喜ぶ

を見れば一層に快樂なるもの也、故に我と同情の人は吾が苦痛を減じて吾が快樂を增すべし、ベーコンの言に朋友は苦しみを分擔し樂しみを增加すと云ふもの即はちこれ也、左れば朋友中の眞朋友、知己中の眞知己、愛する者の中の最愛者にして若し我に同情を示し呉るゝ時に於ては、我が苦痛何如に大山の如くなりとも之を忘るゝを得べし、我が樂しみ何如に細砂の如くなりとも之を天地に充つる樣に感ずべし、則はち我が一家人、特に一家人中の尤も親しきもの、我が愛妻に如此き同感を表せらるゝに於ては、良人たるものゝ幸福之に過るとなけん、此に於てかホームは良人の爲めに至幸極福なる天國とはなるなり。

故に眞とに良人を助けんと欲するの細君は如此く覺悟し、眞とにホームを調へんと欲するの細君は如此く承知せざる可らず、此時に於ては細君たるもの決して外事に盲目なる可らず、良人が苦しみたるも外事に關係しての事なり、又其の喜こぶ事も外事に關係しての事なり、或は國家に係はるの大事業を成し遂げたりと云ふか、若くは正を踏み乍ら不幸にして失敗したりと云ふか、大凡そ一國、國民などに大關係なる事を爲して其の成功不成功に於けるの感情を抱きつゝ歸宅する時、細君は鍋釜の事、擂附の事より外は少しも存ずるとなきに於ては、彼女は抑も何如にして其良人に同情を表せんや。良人條約改正の事を憂ふるとき、細君は隣りの御家内との談判に痛憂し、良人株劵の暴騰暴下に憂ふるとき、細君は大根カブラの事に掛念し、良人國民の自由の爲に慷慨する時、細君、お三の氣儘なるに腹を立てゝあらば、良人は抑そも何人によりて慰さめを得んや。此に於てか良人は一切外事を其細君に告ぐるとなし、自ら憂ひあるときは沈默して不平なり、細君甚はだ心配して之を問へども告げて効なきが故に良人之を語らず、此に於てか細君徒らに怨らみ良人をプリ〳〵する邪見のものと誤解して反つて頬をふくらす、良人たるもの安んぞ更らに不平ならざらんや、若又良人大ひに喜びて歸るとき例の如く其故を告げずして獨り莞爾たれば、細君亦之を喜こぶと云へども其故を知らざるが故に少しく氣味を惡くし、時に良人を疑ふて他所に何等かの思ひ者あるやに邪推するとなきに非ず。嗚呼良人と細君との相違する如此なれば此れ天地の如く相違するなり、天地の和合して調和せざるは猶ほ雲泥の相調和せざるが如し、如此き良人と細君とに和樂せるホーム決して在り得るとなし。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

故に細君にして眞の細君たらんと欲せば、良人に同情を表するの力らなかる可らず、良人に同情を表せんと欲せば良人が運動する外界の事を承知せざる可らず、然らば女性に向つて汝ぢ眞正の婦人たれよと教ゆるものは、亦之に向つて汝ぢ内事を知るの外に亦た外事を辨知せよと教へざる可らず、之に向つて汝ぢ快ろよきホームを作れよと教ゆるものは、亦之に向つて汝ぢ家内の衣食住を十分にするのみならず併せて外界の事を心得置よと教へざる可らず、苟くも然らず、女性は之れ好家を作るべきものなりと言つて之に少さかも外事を知らしめざるは、之れ女性を驅つて寢所の妻となす也、猥褻の妻となす也、御膳香の物の妻となす也、之を良人たる一男子の妻となすに非ざる也、吾人は女性の本領をホームに在りと信ず、鍋釜に在り、流し元に在り、茶の間に在り、奥の間に在りと信ずると能わず。

故に女性をして全く外事を知らしめざるは、之れ彼女をして眞妻たるの資格を失なわしむるもの也、彼女をして良人に於ける最幸最福なる同伴者たらしめず、但だ之が下婢たらしめ侍女たらしむるもの也、其言ふ所ろ婦女子に教ゆるに在りと云へども實は婦女子を愚にするにあり、婦女子に信切なるが如しと云へども實は婦女子を下等にするに在り、一見すれば婦女子の恩人の如くなれども實は非常なる敵なり、吾人は此の如き僞教師を退けざる可らず。

故に婦女子は成るべく外事に注意し、能く外君に同情を表し得るの資格を造り置くべし、良人の外より持歸るの憂ひあらば之を慰さめて洗らひ掃ふべし、良人外より喜こびを持歸らば之を祝して一層に喜ばしむべし、而して時には其意見を呈し、良人が千慮の一失を補なひ、彼が外に於けるの運動に責任を共擔すべし、如此なれば良人と細君との同情はいよ〱密着し、遂に夫婦は實に同心一躰の者となるべし。

吾人今日の御婦人方の談話を拜聽し、其外事に應揚なるに喫驚するなり、世の中は如何に成らうが少しも御頓着遊ばすとなく、其の畢生終身の大掛念として、或は恨み骨髓に徹するとか、喜こび天上に達するとか云ふとは、洋服が似合へり、東髮が能く出來たり、孫が唱歌を歌ひ得ると云ふ類の事に過ぎず、大臣の暗殺せられたるをも知らず然し乍ら猫の頓死したる爲めに三日涙を垂るゝの慈悲あり、之れ豈に御婦人の本職に適へるものならんや。固より中には非常なる賢夫人多し、其多くあるとは世人が決して想像し能わざる程に多くあり、

然れども滔々たる世上一般の女性に對しては吾人實に如此き歎辭を寄せざる可らず、此は吾人が獨り歎ずるものにあらず、彼の幾多の賢夫人と談此に至るときは、常に此の慨歎に切まりて禁ずると能はざるもの也。

嗚呼女性の天職はホームを美にするに在り、而してホームの小なるや一室にあり、稍や大にしては一家にあり、更に大にしては一國に在り、遂に天下に渉る、女性が國家に盡す、慈善的、博愛的、美術的、文學的、宗教的、教育的、の事務細大巨多にして數ふ可らず、其の當に爲さゞる可らざるの義務は、一室を調ふるに在ると共に又天下を調ふるにもあり、其の慰さめを要するの人は、弱き兒供、勞れたる良人に在ると共に世界幾多の憐れある人民にもあり、女性諸君が注意を要する所ろ豈に常に四本柱の内、庖厨の隅、寢室の側はらにのみあらんや、眼を放つて見よ、野は汝等の爲めに多し、廣ろし、遠し。

論説

○眞情より出でたる文字　　不知庵主人

文は情あるを尊ぶ。情なきの文章は如何に粧飾あるも今戸燒の人形に金粉を施したると全樣にて尊ぶにたらず。古人が文章を撰ぶに鏤心刻骨して得たるものよりは寧ろ天眞を存する書翰日記類に取る事多きは情あるが爲めなり。世には詩文を作るに文字ばかり奇麗にすればよき事に考ふるもの多く、恰かも小兒がしんこ細工をする如くに色よきをねり集めて文章の美を効したりと滿足するは大に笑ふべし。其終局する所彼れの一句此れの一句と若かぬものを無理に着けて、苟くも欲するの文字を得れば蛇に足を添ふるも龜に羽を與ふるもよき事と考へ其情に到つては更に求めずしてなほ得意たり。古人が文を作る豈此くの如き事あらんや、其衷情より出でゝ筆を驅ればこそ人をも動かすなれ。今の文字は筆の爲め驅られて更に情なければ鬼神はをろか椚が泣男だに涙をながさしむる事能はじ。此頃芭蕉反故文を讀みて我知らず不覺の涙に暮れぬ、其粹をぬきて世に示さん。

九日　諸子の取はからひとして古き衣裝又夜具などの垢つきたる不淨あるをぬぎかはしよき衣に召せかへまゐらせ申す師の曰く我れ邊地波濤のほとりに草を敷殺ね塊を枕として終をとるべき身のかゝる美はしき褥の上にしかも未來までの友とちにぎ〳〵しく鬼錄に上らん事受生の本望なり丈草去來を召し昨夜目の合はざるまで不斗案じ入て吞舟に書か、

せたり各詠じたまへ

　旅にやみてゆめは枯野をかけまはる

枯野をめぐる夢心ともし侍るいづれなるべき是は辭世にあらす辭世にあらざるにもあらず病中の吟なり併かゝる生死の一大事を前に置きながらいかに生涯好みし一風流とは云ひながら是も妄執の一つとや云ふべけん今はほいなし去來言左にあらず日々朝雲暮雨の間もおかず山水野鳥の聲もすて給はず心身風雅ならざるなくかゝる河魚の患につかれ給ひながら今はのかぎりに其風神の名章を唱へ給ふ事諸門葉のよろこび他門の聞え末代の龜鑑なりと涕すゝり泪を流す眼あるもの是を見バ魂を飛さん耳あるもの是を聞かバ毛髪これが爲に動かむ列坐の面々感慨悲想して慟絶して聲なし是師翁一代遺敎經なり此日より殊更にをとろへ給へり度數しれず

去來記

其日のさま見るが如くとりわけ旅に病みての句をかくも作りしがいづれかまされるなど芭蕉翁の聲かすかに耳に響く心地す殊に末段——此日より殊更におとろへ給へりの——一句は悲哀をして更に一段の悲哀ならしむるの妙巧力あり。

十一日朝また／＼時雨すおもひがけなく東武の其角來る是は東武の誰彼仝伴にて參宮の序和州紀州をうちめぐり泉州より浪華に打入りしがはからずも師の勞りおはすと聞つけそは此處とたづねまはり漸くにかけつけたり直ちに病床に參りて皮骨連立したまひたる躰を見まゐらせて且愁ひ且よろこぶ師も見やり給ひたるまゝにて唯々泪ぐみ給ふ其角も言何なくさしうつむきゐたりしを丈草去來支考其外の衆次の間に招き御病症の始終を物語る此夜夜すから伽して思ひたりし事ども物語り居たりしに亥の刻ごろより師夢のさめたる如く粥をのぞみ給ふ人々嬉しさ限なく次郎兵衛取計ひて疾く焚あげてすゝめ參らす中がさ椀にて快くめされけり朔日より已來の食事あり土鍋に殘りたるを去來椀にうつし入れておしいたゞき

　病中のあまりすゝりてふゆごもり　去來

去來曰く趣向を他にもとめず有あふ事を口ずさみて師を慰さめまゐらせん深く案じいらねど頓に句作り給へ惟然は前夜正秀と二人にて一つの蒲團をひつぱりて被りしにかなたへひきこなたへひきて終夜寢入らざりけれバはてはしらじらと夜明けるに其事を互に笑ひあひて

　ひつぱりて布團にさむき笑ひかな　惟然

をもひよる夜伽もしたら冬ごもり　正秀

一坐是を聞ていづれもどつと笑ひければ師も笑ひたまへり人々嬉しさ限なく十日以來の興にぞありける初しぐれありければ空とく晴れて日影さし入りたるに蠅のおほく日南に群がりゐたるに人々黐もて蠅をさしとるに上手下手あるを見給ゐて暫らく興に入りたまゐければ大病中の事なれば忽ち倦みたまひ直ちに寢所に入りたまふ(下略)　支考　記

是段大病中の翁の興に入り人々も共に樂しむさまを寫せり。悲中に歡を出すの巧自然に出て少しも冗用の字句なく無益の粧飾なくしてしかも感應の力は他の徒らに悲哀の文字を臚列するに超絶す。唐土にて武侯が出師の表は最も忠愛の情より出でたるものなればこそ凡俗の文字をもてなほ人を動かすべきを文に趣味なしなど罵るは未だ文字の神髓を語るに足らざるなり、肺腑の中より流出して簡潔意を盡せるは前後比倫といふべし、前に擧げたる反古文は其角が終焉記（本社雜誌百六十六號にあり）の原料なるが終焉記より感應の力はすぐれたる樣に覺ふ。楚辭歸去來辭等の人をして感動せしむるは畢竟眞情の溢れし爲めなり、長明が方丈記の如きも多少文飾の爲め制せらるゝ點もあれど日本文章中に稀れなる感應力あるも又此故のみ。紀行文又は羇旅の作に絶唱のもの多きは名山大川に觸れて思はず眞情より發する故なり、故に古來より詩家文人は山河を跋渉し來らざれば好文字を得がたしと云ふは則ち是なり。余は文學の粉飾を必ずしも無用なりと曰はず、唯眞情より發する文字の更に感應すべきを見る。

○女學生讀書戒　女學子

左は編者が明治女學校に於て演說したるものゝ大意を社員が筆記したるもの也

事物を考ふるには、本末、輕重、大小と云ふことを深く考へざる可らず、凡そ末は本よりも末なり、輕は重きよりも輕ろきなり、小は大よりも小さきなりとは、火を見るよりも明らかに白日を見るよりも明白なり、然るに此明白なることの餘りに明白なるゆゑか世人往々之に注目せざることあり、歎ぜざる可らず。

茲に百金の黄金ありとせよ、之は決して價ひ無きものに非ず、實に尊とむべく、重んずべく、或は尙ほ貴いたしとも思ふ可きものにてあるべし、然れども別に千圓の金貨ありて之に双らび、吾人は二つの中ち其一を採らざる可らずと云はゞ、何人と云へども百金を棄て千圓を取るべし、此れ百金に取るに堪ゆる價いなきが故にあらず、但だ之を千圓に比較して其價ひの及ばざるが故に之を擇ぶもの也。

茲に愛すべきの植木ありとせよ、其葉黄ばみたり、虫くひたり、砂に塗みれたり、苟くも植木を酷愛するの老翁にてあらば之を其儘に放却することなし、先づ目鏡を掛け、鋏を握り、腰を伸ばして之に手入することならん、其の黄葉を去り、其虫ばみたるを去り、其砂を洗ひ去るが如き、寧ろ感心すべきの手入にして亦た爲さゞる可らざるの手入なるべし、然るに此の葉の黄化するは根に養なひの足らざるゆゑなり、虫の之を蝕するは害虫の地より匐ひ登るがゆゑなり、砂の之に塗みるるは雨の地を打つて叩き上げらるるがゆゑなりと知らば、彼の一葉一葉を去りて日々日々に手入するは寧しろ後まわしにせざる可らず、即はち先づ其根に肥料を

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

施し、其根の周圍に溝を堀り、其根の周邊に灰を引き、斯して遂く蝕なひの足らざる、虫の登る、砂の叩き上げらるゝとを防がざる可らず、老人が最初の手入の無用なるにあらず、但だ之を後の防禦法に比較するときは其價値の少なきを知る、即はち是れ末事は本務の後ちに立つべし、末は決して本に先んず可らざるとを證するもの也。

大小、本末、の先後は大率ね如此し、吾人は亦更めて輕重の何れか重んずべきかを論せざるべし、蓋し十斤は百斤よりも輕るし、大切の事は小切の事よりも尊ときゆえんは、三歳の小兒と云へども尚ほ之を知るがゆえ也。

夫れ、輕重、本末、大小の考へざる可らざる如此し、而して之を考ふるとの易々乎々たるは亦た如此し、然るに世人が事に實際に臨みて之を思はざるの甚はだしき一に何ぞ此に至るや、世人果して輕重、大小、本末を較するとを知らざるか、否な知らざるに非ず、極めて能く之を知れり、但だ夫れ之を知つて之を辨ぜず、辨じて而して能く實行するとを敢てせざる也耳。

吾人今の世務百般に於て常に此歎を有す、今は只だ女性諸君に就て之れを論ずべし、特に今や秋清爽々として學事最好の時なるを以て、專ぱら女學生諸君の勉學法に就て之を論ぜんと欲す。

大凡そ物の世に存する何事かの役あり、苟くも一點の役だにあらずんば、其物決して世に存するなけん、況んや何如なる書籍と云へども、何如なる事實と云へども、何如なる智識と云へども、苟くもすでに書籍と云ひ、事實と云ひ、智識と云ひ得るの限りは、之を學んで其効あらざるを決して無し、万一もし之を學び置かば、万一其用なきを必らずや之れなけん、假りに多くの人の名を覺え置かば異日郵便屋の一助にでもなるべし、又多くの書物を讀み置かば書籍舖の小使には甚はだ適當となるべし、故にすでに學問すると云ふ以上は其學問の何事かに役に立つとをなきにあらず、左れば吾人が問ふべきとは其學問が役に立つか立ぬかの問題にあらず、抑そも何如ほどに役に立つか、又た此の學問を學びたるの時間及資力を以て更に價多き他の學問を學ぶと能はざるか否や、一言するに其の所云る學問なるものは最大、最重、最本の學問なりや、若くは只だ本を棄てゝ末を取り、大を棄て、小を取り、重を棄てゝ輕を取り、他に更に多くの益を得べかりし時日に於て大ひに之に劣るの益を得たるものにあらざるかと云ふと、是れ即はち吾人が學問する時に於て問ふべき大切要の問題なりとす。

然るに茲に物識り、博學、强記、と云ふことを以て學問唯一の目的となすものあり、之に詰すれば何事も知り、之に問けば何事も答へ、之に試むれば大抵の書は讀み盡し、而して强記銳敏にして懸河流るゝが如しと云ふ、吾人もし如此き人に面すれば幾分か之を尊重せざる可らず、何んとなれば之れ凡人にあらざれば也、其人の學問に向つては吾人亦た幾分か尊重せざる可らず、何んとなれば之れ無學の人にあらざれば也、然れども吾人は之を以て最重の學者なり、最良なる學問の仕方なりとして感服すると能はず。

夫れ世界に於て尤も多く書籍を藏するものは書籍舖なり、尤も多く文字を知るものはウエブスター氏の字書か康熙字典の類なり、尤も多く事實を知るものはエンサイクロペデアか百科全書の類なるべし、然れば茲に吾は數多の書籍を藏す、數多の本を讀みたり、數多の文字事實を知れりと云ふものあるも、夫丈にては決して彼の無生物などに及ぶとなし、茲に万卷の書籍を暗んずるものありとせよ、若し一卷の價十錢ならば書物の代價通り千圓位ひの價値はあるべし、或は是れ三寸圓形の腦中に蔵めたる重寶なる書籍集ゆえ、千圓よりは少さか多く價値するものあるべし、然れども夫より外に何の賞すべき所ろもなし。

蓋し書籍を讀むの得ハ、之を讀むとにあらず讀みて智識を加ふるとにあり、然れども必らずしも只だ智識を增すと云ふとにあらず、之によりて智性を練り、智力を長じ、腦髓を健剛精妙に爲し得たるの得にある也、たとへば學問は足をならすが如し、母其の赤兒の手を取りて歩るき方を教へ、教師子弟に諭として歩るくべき道を教ゆ、之れ學問なり、然るに未だ嘗て道樣の幾千ありやを辨ぜず、況んや未だ嘗て其歩るき方をも慣らし得ずして、卒然人力車に乘り、馬車に乘り、もしくは岡蒸氣に乘りて瞬時千里を走りたりとも、其人一身の能力に於ては增加する所るなし、故に車より下りたる時は元の赤子なるなり、彼の何の嘲分るともなく、何の能力を加ゆることもなく、たゞうかくとして暗誦し、記臆し、多讀多聞して學校を卒業したるものは、恰かも之れ千里一走して車止まり身下りて元の赤子なるもの、如し、此如き學問の仕方は何の功能もなき也、否な毫末の功能もなしと云ふにあらず、斷じて多く功能あるものにあらずと云ふ也。

茲に何人も之を見、何人も之を讀み、何人も之を所有するの大書籍ありとせよ、天下億兆の人相共に之を所有し讀見するとせば、たとひ此の書名を知りたればとて、又此を讀みたればとて何の優る所もなけん、況してや何の誇るべき所ろもあ

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

らざるべし、如此き普通共有の尋常書籍に對しては只だ之れを知れり、讀めりと云ふ丈けにて貴むべきにあらず、讀みて而して后ち隣人未見の部分を發見し、たとへば人の未だ開らかざりし一枚二枚の表紙をむくりて其内面に存するの眞文字を發見し得たらば之れ少さか人に誇るべき所ろあるべし、古人讀書万卷眼紙背に徹すと云ふもの即はち之れなり、眼紙面に止まるのみならば人皆な能くしたり、其紙背に徹して始めて人の爲ざる所を爲せし也、一歩を進みたる也、一般を深く入りたる也、之を學問上に於て優れりと云ふべきか。

然るに世上には何人も知り、何人も見、何人も讀む所ろの普通共有なる尋常書籍あり。見よ此の森羅万象の天地山川は大ひなる書籍にあらずや、海には波瀾あり、山には起伏あり、日月には照應あり、其の賞罰應報は厳として規律を定め、國家人々の榮枯盛衰は或は悲曲となり慘劇となる、古人之をコスモスと稱し、煥乎たる文章と稱し、美妙なる天地と稱し、妙なる自然と稱す、實に此の大世界は一種の大書籍にてある也、世上十六億の人類皆な一齊に之に向ふて之を讀む也、此時に當つて何人か此書籍を知れり、讀めりと云ふ丈を以て人に誇ることを得んや。たゞ其能く人に優る所ろは人に超はて之を徹見し得るの時にあり、即はち農夫は風に嘯ふきて山を山なりとせり、洗婦は水に映して川を川なりとせり、然れども詩人之を見れば俗者の眼こに於て感じがたき事美妙を感じ、哲學者之を見れば無學者の眼に於て見がたきの妙理を感ず、フランクリンあるに至つて天頼はかに電氣を創造せしにあらず、ワットあるに至つて茶瓶の湯氣初めて立昇りしにあらず、ニユウトンあるに至つて林檎の果實初めて落ちしにあらず、若し夫れ百姓に至つては雷鳴毎に臍を隱したることあり、細君に至つては湯氣吹く毎に蓋を取りしことあり、園丁に至つては果物落る毎に歎息したる者もあり、然れども未だ嘗てワットの如くニウトンの如くフランクリンの如くに此の書物を讀まざりし也、否な三氏の如くに之を讀みたりし、然しながら三氏の如くに之を解釋するの力あらざりし也、此に於てか彼等はいつまでも凡人なりし、然れども三氏は之によりて大哲學者となりし也。されば書物を見讀したりと云ふは何んぞ誇るに足らん、只だ之を解釋する力の有無によりて之を上下すべし、而して如此き解釋力の大ひに優る者を以て必要なりとせば、彼の學問することに於て只だ博學なり、强力なりと云とのみを以て貴するに足らざるの理を知るべし。

故に學問に重んずる所ろは腦力を增し、德力を增し、感情を增し、必竟其一身内に存する能力を發達し、鍛練し、剛强にして、事に臨みては一個獨立の解釋を發し、事に臨みては一種新創の事業を爲し、盤根錯節に會するときこれをバラリ／＼と切離ち、亂糸紛々たる所ろに至ればスラリ／＼と解き放ち、能く己を信じ、己の礎に立ち、己の力を用ひて之を辨ずる　の境に至り得るに在也。學問して此に至らざるものは喩へば富める豪族の息子の如し、金も多し、人よりも尊とまれ、寶器家財有り餘るほどに多し、然れども此等のものたゞ其の身外に附着したるものの也、身中に徹存するものにあらず、故に如此き息子にして世間に出るときは多くは人に欺かれ、事に失敗し、身代財産乍まちにして煙散するもの也、此時に於て腕二本ありと云へども極めて丈夫なり、足二本なりと云へども能く一身を確立せしめ、所有物はたゞ我と云ふ感覺のみなりと云へども、此感覺、万物顛覆するとも壓破せられずと云ふの獨立丈夫こそ反つて大ひに優ることあらん、多讀の學者と創見的の學者との相違大率れ此に似たり。

故に學問するものは先づ能力を增すことを專一とすべし、幾卷の書を讀みたり暗誦したりと云ふ事を以て可也と爲しがたきなり、左れば女學生の學校に於て稽古するに亦た常に此の覺悟なかる可らず。

啻に一般の學生の如く此の覺悟の無る可らざるのみならず、女學生には特に此の覺悟なかる可らず、夫れ男子は創見に富み、女子は解釋に長じ、男子は結構に富み、女子は想像に長じ、男子は冷々として研窮し、女子は溫熱として感悟し、男子は一歩一歩と立ち上り、女子は卒然として直覺す、故に概して女子の創見の男子の創見に及ばざるは其天性に於て免る可らざるものなりと云へども、其の今日の日本女子の如くに甚しからんは決して其天性にあらず。日本女子は只だ人に從へと教へられたり、只だ舊式を守れと教へられたり、故に新らしき道を步み、一個獨立の創見を發する如きは、寧ろすでに女性の德に於て欠けたる所ろあるが如くに見做されたり、左れば今日の日本女生はたゞ記臆せん、暗誦せん、まねを爲さん、人の通りに隨わんと云ふことを以て終生の覺悟となしたるが故に、其性亦た自づからいよ／＼摸倣的となり、其學校に於て學問する時にだに一種の新意見を出さんなどと思ひて學問するものは甚はだ少なし、此れ豈に女性自然の性ならんや、實に習慣によりて曲げられたる卑屈屈從的の弊害より發すること至つて多し。左れば今日の女學生が其修學の覺悟に於て特に前段の覺悟を必要するや最とも大なり。

蓋し女生を教ゆるの人は旣に經驗したるなるべし、彼の女生等は只だ先生の言わるゝ通りに從はんと欲し、先生の教へたることは金科玉條なりと心得、書物に於て讀みたることは最早動かす可らざるの眞理なりと感じ、万事たゞ飲まんとし受入れんとして之を學ぶものなり、故に其書物を讀むときも之を研究せんとは爲さずして講釋せんとし、之を疑はんとはせずして信ぜんと欲す。左れば女學生は少さか舊來の弊習に奴隷とさるゝことを脫し出で來つて、更らに斬新の爲に其の奴隷と爲されんとは爲す、悲しむべきにあらずや、凡そ如此きことは日本人の通弊にして今の男學生に憂ふる所ろも亦此れ也、然れども此事に於て尤も多く憂ふべきは即はち今の女學生にてあるなり。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

批評

○如温武雷士傳　民友社發兌

自由貿易に於けるジョン、ブライトは經濟雜誌によりて我國に紹介せられ、峻峭剛正の政治家としては國民之友によりて文學社界に誘引せられたり、而して今ま民友子の弟君德富健二郎氏は演説集、時代集、及び當世の雜誌新聞紙等に據りて一百四十三頁の如温武雷士傳を編輯したり。

クリミヤ戰爭は正義の裝ほひの下に、慘忍なる怪骨を包みたるもの也、ブライトは固より之に反對せり、本傳此事を叙して曰く、

此時ブライト氏は方さに四十を踰ゆる三歲の盛齡にして尤も氣魄の盛んなる時と云ひ、際すれば愈揚り枉ぐればますます直き氏が「ピユリタン」的の精神は四邊の攻擊刺衝につれて方に其絕頂に達せる時と云ひ、理に據り道に遵り人情公義を保護として以て單身一世の偏僻に抗するの自覺は氏が精銳の氣を發揮し盡して剛毅忍耐の精神淸廉潔白の德榮花の如く火の如く簇がり來て皆此の暫時に會せるをと云ひ、百代に卓絕せる氏が雄辨の力は殆んど其最頂點に達し語々錦の如く句々風霜を挾み、今日之を讀むも猶凜々として紙上に聲あるを覺ふ、而して如此き演説も以て其人心を翻す能はざりしを見れば、一般人民が戰爭に熱中せること得て知るべきなり。

此時氏は左の言を以て其反對演説を結びたり、

余は政治家にあらず、亦未だ曾て政治家を氣取りしことあらず、今日に當て彼の政治家なるものは實に腐敗し墮落せるものなれば、彼の潔白高貴なる心は之を望んで可なるや否や余は斷言する能はざるなり……余は風吹く度に我帆を引揚ることをなさず、余は余を此處に遣はしたる多數人民の意見を微弱ながら正直に代表し、總て余を遣はしたるもの丶眞正の利益を計らんとする平易質朴なる一市民なり……

……ヨシ此の戰爭を非とするものは余一人のみなりとも、假令余が聲の外には兵器戛騷の音を駁するの聲なくとも余が心を慰むるものあり、啻に今我心を安んずるのみにあらず、我が最期の時までも余が心を慰むるものあり、即ち我國財を濫出し我國家の尤も貴重なる鮮血の只一滴をも絞りとるが如き其の言は、曾て一言だも我が口より發せざると是れ余に取て無限の價値ある安慰なり。

此等の言能く氏が淸高謙强なる德を示すに足る、特に末段第九章（社會に於けるブライト氏）及び第十章（家庭に於るブライト氏）の如きは、凡そ國家並に道德と云へることに着目するもの丶一讀を要する價値あり。

文章簡易淡麗にして甚はだ能く意を盡し、ブライト氏一生の最高最純なる所ろを現はして殘すとなし。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○近日出色の小說

楠陰處士

「野末の菊」は嵯峨の屋氏秀作の一なり。もしある一種の文學論者より云へば是も――男女の書生を主人公とする――の非難を免かれざれど公平なる眼をもて見れば近來不思議の好著述と云ふべし。匡が故郷に歸り兩親姉弟に面會し幼馴染のお糸と語らふ一段は頗る平穩にして和氣滿々たる好文字、田園の景色風韵は恰もゴールドスミッス氏の作を讀む心地す。今は和平の氣に乏し、其間に此文字を得るは枯野風霜の中に楚々たる寒英を掬するが如し。而して末段に及び一轉して人生落魄の境界を寫す、翩轉自在眞に妙巧を極む。‖草刈の子も一と握り野ぎく哉‖。

美妙齋主人の「いち子姫」は蓋し作者の傑作ならんか。未だ大尾せざれバ全篇を評するを得ざれど文章は大に面目を改め、從來の諧謔に陷りたる――所謂言文一致の通癖を脫し――筆力飛騰の勢あり。‖一とまはり待人をそきおどり哉‖。

北邙散士の「流轉」は近時出色の好小說にして日本文學に稀に見る處の立案なり。世に出でゝ既に十旬、批評を試みるもの多けれど悉く肯綮に中らず、唯皮相に喋々するのみ。夜闌にして燈火さびしき時讀了れば神氣轉た澄滑たるを覺ふ。‖人呼びにやるも夜更けつむしの聲‖。

篁村先生の「徘諧季違ひ」は先生獨得の文字にして類と眞似なし。非凡超出の佳作。僅かに數頁に過ぎざれど藪竹繁陰の間に翠色一と際美はしきを見る。紅葉先生の「風雅娘」――是も超凡の諷誡小說にして一箇の妙筆なり。一は輕き處に妙味あり、一は重き中に奇巧を供ふ。一は其碩より出で、一は西鶴より來る。共に文に深く觀察に富まざれば能はず、千紅萬紫の中に綠竹蒼松を見るの感あり。‖兩の手に桃と櫻や草のもち‖。

露伴子の「露團々」は奇想天外より來るとも云はんか。立案は作者の發明とも覺へざれど、文味の更に巽なりて一生面を開けり。‖宵闇の稻妻消すや月の影‖。

以上六種は近日出色の好作にていづれをいづれとも區別をつけがたし。各々一種の風骨を備へ他の似而非小說家の如何にしても摸すべからざる妙趣を含む。東西の先進文學家が經營したる文字を深く味ふて其粹を腦中に集めて一派の文宗を作りし卓見家にあらずんバ到底望むべからざるなり。かの徒らに他を摸倣し、西施の顰眉を眞似て自ら揚々たる人焉んぞ其堂に到るべけんや。

美妙齋主人の文初めサカレーに出でたりと覺しく、其頗る縱横なるに任せてサカレーの最短處をも學び、終に他の摸倣主義家をして一種の變奇なる言文一致躰を作らしめたり。「いち子姫」は能く其弊を脱し更に一段長足の進歩をなせり。言文一致の迷信家は宜しく是を味ひ、深く言文一致の堂奥を透見する處あれ。

嵯峨の屋氏は頗るトラゼデーの嗜好者と見へ其作は大抵慘澹をもて終れり、かの最も和平なる「初戀」の如きすら猶ほ讀終つて愁然たるの思あり、蓋し吾國の文學は不自由より發達し鬱憂不平的に陥りしをもて是を學ぶ氏の立案如此くなるは毫も怪しむに足らざれど或はある批評家の難ずるあるやも計られず。もしあらば氏の悲慘なる諸作各々其態を異にせるを注意すべし。「野末の菊」のキャラクターは他の「無味氣」其外にあらざりしあり。

北邙散士は如何なる人たるを知らねど「流轉」を作りしものは東西の哲學書を玩味し一種の學論を腦裏に作りて深く宇宙を大觀せしを知る、然らずんば高遠何ぞ如此きに到らん。

篁村先生は其碩を學んで更に一躰を創作し。紅葉露伴の二氏は西鶴を學んで別に又一躰を作れり。もし此三氏の作を取つて元錄前後の文學に比せば諸氏の文は明かに元錄より來るを推知すべけれども自ら相逆して妙味異なる點を發見すべし。西鶴は日本文章の極粹なれば此三氏を目して是よりも青しと曰はず、然れども他の學んで堂に到らざる摸倣家にあらずして別に一機軸を出したる卓識に服す。

今の文壇別に春の舍二葉亭等の諸氏ありて各々特質の文學をもて一家をなす。而して余は特に方今の女性文學家及び文學家たらんとするの女性諸氏に望む、願はくハ西洋の文學を味ふと共に日本徳川時代の文學を深く研究されん事を。スコット、ヂッケンス等を玩味するは元より欲する處なれど遠く源氏狹衣近く八犬傳田舍源氏をもて日本文學の上乘と滿足せられず我が最も欽仰すべき元錄文學を攻究せらるべし。此頃最も名ある二女子の作を讀みて余は大に落膽せり失望せり。願くハ多く作らで廣く攻修せられよ。||さゝけめし妹が垣根は荒にけり||。

此頃醫學士の説に、綠色の眼鏡は効なくして害あり、青色の眼鏡も亦た効なくして害あり、只だ烟色のは有効にして決して害なしとぞ。

近頃ろ東京府下に琺瑯(ハフロウ)を施こしたる鍛鐵製の銕鍋を販賣する事あり、此の物多量の鉛をふくみて有害なりとの説あり、其の筋に於て之が試驗を爲されたるに果して臺所用に供しては害物なりとなり。

雜録

○女權伸張策表裏　みどり

われ嘗て論じけるやう、女權伸張に表裏の二途あり、現はに男子の壓制を責めて其氣儘を挫ひしぐは表向の手段にて、陰に女性の尊とむべきとを知らしめ、男子をして自づからに婦人を敬せしむるは裏面の手立なりと、而してわれは男子にして女權伸張に熱心なるものが表面の方法に盡力し、女は温和しく裏面の手段に力を盡すは以て穩當なりと思き、女學雜誌が高らかに激論すると共に、女性に向つて只管ら優さしかれと勸むるは大方此の心にてありけんかし。

蓋し孟子は、其母の賢ありしによりて孔子よりも女を敬まひたり、スチウワートミルは其妻の清かりしによりてソクラットよりも女性を尊とみたり、母妻もし賢良ならば其子、其夫を驅つて婦女子の爲に盡力せしむ、之を帷幄の内に在りて人を指揮すと云ふ、又た内に在りて人を動かすと云ふ、感化を以て他を導びかんとする女性には此上なき方法にてあるべし、左れば母の賢ならんと、妻の良からんとは、啻に其子及其夫に付てのみ益あるに非ず、女性總躰に付て益ある也。

○婚姻と女權論　是空子

鼎軒ひそかに余の爲めに心配して、余れ若し妻を娶らば女權論の鋒にぶらんと云へり、蓋は古來女を尊とみし人は多くは無妻の人にして、彼の一生行すまして山寺に聖めかしたる上人等にのみ尊女者多かりしゆへと云へり、然るに余れ娶りていよ〳〵女權論に加擔すると強し、鼎軒乞ふ安んぜよ。

○クロムエル臨終の祈禱　しのぶ

一千六百五十八年八月三十日、黑雲滿天を覆ひ、疾風樹木を拔く、時に白布の床を圍繞する侍臣、死する所ろの英傑クロムエルが臨終の語を發するを聽けば、

ヲー主よ、たとひ吾は憫れむべき罪人ありと云へども、今ま爾ぢと共に在り、吾は眞とに値價なきものなれども、爾ぢは爾ぢの民を幸わいあらしむるの器械と爲せり、ヲー主よ、願はくは尚ほ續きて彼等を救ひ、爾ぢの御名をして全天下に榮へあらしめ玉へ。

之れクロムエル一生の大動機あり、彼は固より幾多の過ちを爲せり、然れども彼が終生終身に於て確有したるものは即ち此の一念にてありし也。

○ボルクの最長所　かすみ

道徳的政治家としては近代にジョンブライトを推すべし、先

代に於ては先づエドモンド、ボルクに指を屈せざる可らず、彼は奴隷貿易に逆らつて聲を發ち、監獄改良に付きてハワードを奬勵し、舊教信徒の爲に其正常なる要求に助力し、身一信徒ありと雖ども異教者が束縛を蒙むるに憤どほり、負債者に對するの酷律に反對し、刑法の過嚴なるを知らしめ、終身徴兵の不當なるを論辨し、特に毫厘の懼れなく東印度會社の罪惡を暴ばき、米國獨立戰爭の爲に公平に加擔し、慘虐ある佛國革命戰爭に向つて斷然として反對したり、而して其辨は當世の衆論客を壓し、文はマコーレーを通じて百世に輝やくに足れり。

史家之を評して曰く、エドモンド、ボルクの最長所は何處にありしや、其の卓見創慮ある所に存せし乎、彼が卓見創慮は非尋常にてありし、然れども其の最長所は此に非ざりき、然らば其の學識深遠ある所に存せし乎、彼が學識の深遠なるは一世を驚かしめたりし、然れども其最長所は此に非ざりき、其の嘲笑的の才、若くは其頓智的の才ありしが爲めか、彼が嘲笑頓智も亦た聽く者をして絕倒せしめたりし、然れども其最長所は此に非ざりき、然らば彼のヘスチングをすら後に瞠若せしめたる彼が熱情に在る乎、若くは懸河滔々として婦人をして絕感昏倒せしめたる彼が能辨に在る乎、若くは何如なる詭辨をも剝落し自から其骸骨を露はさしむる彼が批評的の警眼に在る乎、然り此等のもの皆な彼が衆に擢んずるの長所なりしと云へども尚ほ彼が最長所にあらざりき、然らば則ち彼が最長所は果して何處に存したりし乎……曰く、彼が大道理を直鑑し得たると、眞理の道德力を認めて、之を明らかに辨論し、懼れなく辨護したる事に在り。

〇踏舞の功能

破月居士

踏舞と申すものは秀麗なる紳士淑女が相携えて躍り賜ふものとか聞及ぶ、居士未だ一回も拜見致さゞる故、二十五坐の御神樂に似たるものか、或は花柳壽輔が振事に類するものかは承知致さゞれど其功能は富士の山程有之よし、先づ深窓の姫御前が御運動、歐米禮法の御修業、男女交際の緒、從て頭痛にも目眩にも、肺病にも胃病にも其功神の如しとか、然して此頃舞踏再興に盡力ある方々の申さるゝ事、饑に泣く小民、身を殺す義士は鹿鳴館樓上の管絃を聞て隨喜の淚を流す可きか、死を顧みずして國家の安危に當り、一身を擲つて國民の元氣を興起せんとする愛國の志士は、丁亥會の紳士淑女に感心するか、國家は多事なり、御神樂の眞似をすべき

時に非ず、醉酒亂舞の時代には候はず。

○淚——淚のみ　ゆかり

秋天星高ふして銀漢淡く、梧桐聲凄ふして露團々、砧聲斷續夢を繞て靜かに、夜蛬の哀音また人を襲ふ、眞にこれ中秋の慘景、遠征の將軍は洛陽の空を仰で歎じ、謫地の昭君行雁を羨みて泣き、孤客は暗燈に醉を飲み、寡婦は孤衾に腸を斷つ、豈唯だ是のみならんや。行程猶遙かにして志成らざるの人、希望未だ遠くして業難きの徒、亂離姦惡の社會に立て公道を張るの士、此の慘憺たる景を見て知らず何の感かある、嗚呼淚——淚のみ。

○俳諧壇の五子　ふ、ぢ、

與謝蕪村曰く五子の風韵をしらざるものには共に俳諧を語るべからずと。五子とは其角嵐雪素堂去來鬼貫なり。共に元祿文學の詞盟にして各々特殊の妙味と風骨を備ふ。其角は神巧嵐雪は潤雅素堂は深高去來は麗玄鬼貫は奇想なり、俳諧の妙趣を知らんとする人深く其作を味ふべし。

○批評家と著作家　其川子

批評家と著作家は各々特異の腦力を持てば偏重偏愛すべからず、然るに今の世獨り著作家を重んじて批評家を輕んずるは何の故ぞ。他なし、著作家歲月の苦辛を一時間の中に冷笑し去ればなり。

○化學者の無慾　輝雄

世の金銀を以て無上の寶とし之を貯ふるに汲々として爪に火を燃すの輩は、化學者カベンディッシの貨幣に無頓着なる奇癖を聽くと雖も、容易に信じ得ざるべし。

カベンディッシは、餘財ある每に之を銀行へ齎らし積金するを慣例とせり、或日銀行掌管人不圖帳簿を調査せしに、カベンディッシの積金、何時の間にやら三万九千圓の巨額に達し居たれば、驚いて思ふ樣、若し此内幾分かを以て貨物若くは土地を購求したらんには、大に氏の爲めに利得なるべしと、即ち是を手代に謀り、氏が宅へ遣して其忠告を爲さしめたり、使者到つて、戶を叩けば、家僕出來り取次せんとして來意を問ふ、然れども使者は之を詰すとを欲せざりければ直接に面晤せんとを乞へり、因つて應接室に誘はれ、待つと凡そ十五分間、隣室に呼鈴を鳴らして僕を呼ぶものあり、耳を欹てゝ其語るを聽けば、主人の聲と覺しく、來訪者は誰なるや、又何用ありて來るかと問ふに及んで、家僕其故を告ければ、カベンディッシ大に不快の面持にて、手代を此處へ案内せよと謚

令命じたり、玆に於て家僕來つて使者を主人の勉強室に導びけり、未だ室に入らざるに、カペンディッシは聲高に、何故なるか、何御用なるかと反覆せり、使者來意を述べんとす、言未だ訖はらざるに………、左程に吾金を受托すると迷惑ならんには、余は强ゐて御依頼申すまじ、直ちに受取るべしと言ければ、使者驚いて、決して銀行の迷惑なるに非ず、只氏を利せんとを思ふて然るのみ、カペンディッシは漸く其意を悟り、然らば君の隨意にせらるべし、余は斯の如き些細なる計算上に心事を勞するの遑なし、第願はくは再び來つて余を煩らはすとなきを望む。

カペンディッシは終日書を讀を以て己が樂と爲し、曾て金銀を浪費せしとなく、其生活甚だ質素なりければ、遺金凡そ五百万圓あり、皆親族に配當せりと云ふ。

○美人化粧に苦む　冷々子

アミエンに、一卑渉ありけり、生來沈着無言にして、何となく聖人の氣風あれども、又能く頓智に長けたり、一日華麗に化粧したる夫人來つて問ふて曰く、妾が顔容紅粉を粧ふと、粧はざると比較して、其美孰れに在る、今に至るまで屢々人に聞くと雖も意に適せず、或人は紅粉を全癈せる方却つて天性の美を顯はすと云ひ、或人は出來得る丈厚く塗る方遙かに艶色を增すと云ひ、我ながら酷はだ判斷に苦しむ、敢て問ふ卑渉の御高說は如何んと、卑渉やをら身を起し、徐ろに對へて、余は元來偏見を取るとを好まず、故に兩說を折衷して、片頰にのみ紅粉を塗るとを勸むべしと。

○田夫及びヂョルヂ王　十一寸月人

英王ヂョルヂ第三世の御世に、ロビンソンなる人あり、微賤より起つて、追々昇進し、終に官林檢査官に登用せられたり。王一日遊獵せんとて、唯一騎乘出し、ロビンソンの所有地なる、ワイクの花田を過ぎんとせしに、不幸にして門閉ぢたれば入ると能はず、少頃躊躇したりしが、門内を窺ふに方つて、一人墻に倚つて立てるを見たれば、聲を揚げて門閂を拔去らんとを求めたり。然るに此者肯て來らず、聞かざる擬似して尙は佇立せり、再たび聲を高めて啓けと言ふに及んで、始めて顧眄し、此門は猥りに通行を許さず、用事あれば廻はり遠くとも外郭に沿ふて行れたし。此時王は耐へ兼ね、言辭烈しく急込んで、汝知らずや、予はヂョルヂ王なり、急速に啓くべしと、命令したれども藐々しく身搖きもせず、君若し王なりせば宜しく外郭を廻るべしと言放ちたり。玆に於て王復如

何とも爲すと能はず、餘義なく此處を立去りたりと。ロビンソンは此日午後に皈宅して、朝の樣子を知らざりしが、家僕一人來つて之を告げたれば、大に驚き、直ちに馬車を飛して王宮に到り、拜謁を乞へり、王は既に遊獵より皈り居たれば、例の如く龍顏悦ましげに、ロビンソンを見て、嗚呼ロビンソンよ、汝の顏色何時になく青ざめたるに非ずや……、放念して意に介すると勿れ、余は吾配下に、廻り道を爲よと云ひたる如き愉快なる人物の多からんとを望むなり……、汝皈らば、余は彼と語るとを好むと告げよ。ロビンソンは王の氣色如何と、心潛かに穩ならざりしが、斯くと聞いて、大に安堵し、無事に王宮を辭し去れりと云ふ。其後ロビンソン、王に遭遇せる每に、必らず廻り道は如何せしやと尋ねたりとぞ、以て王の寬忍大度なるを知るべし。支那及日本亦如此き談あり。

○アラベラ、ジヨンソン夫人の傳

田部武治

今を距る殆二百年、英人の大西洋を橫絕りて、米洲大陸を創立せしや、ニューイングランド州に殖民するものを以て嚆矢とす、而して此地實に多數の豪傑を嘯集せしが、其宗教上の自由を獲んが爲に、一身を犧牲に供し、鼎鑊猶ほ且つ其志を奪ふと能はざるもの、彬々女性中に輩出し、一たび其風を聞くもの、頑夫も廉に、懦夫も志を立つるあり、蓋し亦盛なりと云べし。

彼の眞心に隨て其信奉せる神を禮拜するに至りては、素より一個人の特權にして、敢て他人の柔製すべきものに非ずとの感念は當時甚だ微弱なりしと雖ども、人心自由の理は獨り欺くべからずして、頗る權利自由の說を主張し、斷然神の意に從て、險を冒すは敢て辭せざるも、寧ろ壓制政府の奴隷たるべからずとの決心を有するものあり、左れば英國政府は、英國教會と共に力を戮せ、此等の人を斥けて顧みず、更に從順恭遜なるものを擧げて、顯要の地位を授けり。

アラベラ夫人は、英國の貴族リンコルン伯爵の女にして、殊寵あり驕奢の中に生長せしが、遂にアイザック、ジヨンソン君に嫁せり、君志氣剛果、才學穎脫、篤く宗教上の自由を執て、現政府を非難せり、左れば、アラベラ夫人は、素より一日同君に歸がば、富貴尊榮立どころに其身を離れ、忽ち苦辛艱難の域に陷るべきを知れり、夫人は更に意とする所なく、滿身の熱血を注て、唯た眞理の爲には良人と共に斃れて已まんとの精神にて、遂に住み馴れし英國を去り、百難を期して、遠く新世界に航す、是より夫人は熱心に同志を奬勵し、遂に千載の下、不朽の光輝を、靑史に發するの偉業を創寂せり。

幽暗不磨千載下、梅凌寒苦吐淸香。

時しも四月の天、寒風肌を裂て、凍雪骨を削る、帆の孤舟は、幾多の義魂を載せ、浩蕩渺茫たる、大洋に浮び、水天髣髴の間、杳然として新世界の際頭出沒するあり、既に近づくに及ては、滿目蕭條として、山水暗濟、況や同行の士、早く既に北邙山下の人たらんとするものありて、一層悲哀の色を添へたり、舟ブリマスロックを過る頃は、舟中相見て色を失する計りなりしが、夫人の壯剛溫厚なる精神に鼓舞せられ、幸ふして一行の銳氣を挫折せざるとを得たり、斯く恙なく、彼地に到着せしや、ジヨンソン君地をボストンに卜して、家を築く、是を現時ボストン府の始とす、是より君大に夫人の高風良擧に勵され、日夜心を移住民の事務に盡し、拮据鞅掌寢食を廢するに至りければ、殖民が君の恩澤に沐浴するもの勝て數ふべからず。

身は艱難の地に立て、非常の責任を負ひ、心は既に苦生を庇置して餘あると雖ども、衣は未だ我身を蔽ふに足らず、倘且つ從容自若、口未だ曾て怨言を出さず、其志氣の豪邁なる、其希望の宏遠なる、蓋し天地も敵すると能はざるものあらん、獨り悲む、富貴の家に長ぜしものは體力常に瘴烟毒霧の衝に堪へ難く、時に香閨一夜無常の風に挫かるゝの憾なしとせず、ジヨンソン夫人の如き、即其一にして、上陸後僅に六閱月にして、忽焉最愛の良人を去り不夜城裏に入る、唯今に至て猶ほ遺芳の人心を薰するあり。

夫人の死後、ジヨンソン君能く其義務を全ふして、殖民の爲に最も黽勉せしと、猶ほ夫人在世の日の如かりしも、君亦病に罹り、未だ一月を出でざるに、夫人に永遠の鄕に伴へり、嗚呼ジヨンソン君夫婦の事業は、恰も半夜の夢に異ならずして、人をして轉た其秀麗逸美の德を追慕して已まざらしむ、蓋し新英洲歷史中の偉人と謂べし。

小説

○すみれ

若松しづ

第二回　花の形容

オヤすうさん心持でも惡う御座んすか、つゝぷしてゐて？、いひながらガラス戸開きて入來る、四十恰好のとしまの聲に驚かされて、

イヽヘ、ナニ少々頭痛がいたしまして。

それは、わるう御座んすチイ。

しかしモウ餘ほど滅らぎましたから、おつゝけ宜敷御座りませう。

きいてヰヽ笑ながら、

ほんとうにすうさんも、わたしの樣にのんきにおなりだと、そう頭痛あんかしないんですがチイ、マア鳥渡聞て下さいよ、わたしつてば、部屋のあんかにあたつて雜誌よんでたんですよ、そうするとあんまり念が入た勢か、いつの間にか、とふ〳〵ウト〳〵して仕舞てさ、だから無理もないんですチイ、今の若い人たちに、天保時代〳〵つて馬鹿にされるのも、だつて論説なんか見てたつて、こゝぞといふ緊要な處へ來るまでには、ねんねこかなんか云れてるつもりで、すつくり寐みつちまふのですものを、かたで、らちがあきやあしませんチイ、オホヽヽヽ、

其笑にそゝのかされて、微笑をどよめかしながら、すみれ、

ソレハソウトおばさん、ヒヨツト雜誌社から參りは、いたしませんかつたか？。

エーソレ〳〵、今云ふと思つてる處、さつき來ましたよ、そうしてお約束の原稿をと云升から、只今客來ですから、出來次第持たして上ませうつて、歸へしてやりましたよ。

ソウデしたか、そんならコウツト、明朝早くやつていたゞく樣に、今夜書かけを、くぎりまで致して置ませう、おばさんは、どうぞお搆なく、お休みあすつて下さいまし。

しかしチイ、モウ十時ですから、あんまり夜を深しちやわるふ御座んせうよ、すうさん。

ハイありがとう御座り升、なる丈早く仕舞にいたしまして、ふせりませう、どふぞおばさんは、御遠慮あく……

そんならお先へ、今夜はひどく冷へ升から、風を引ない樣になさいよ、ドヲ火でもよくして、いきませう。

いひながら、薪二三本さゝやかなるストウヴへくべ、ガラス戸のメ切に注意して、廊下傳へに我部屋へと退りたりしが、こゝろの中に、

どふも變だよ、今夜こそは澤部さんが思切つてあの子に相

談をかけになすつたに違ないと、チャント目星を打つて置たんだが、それにしては、なんだか様子が妙だよ、もしはなしがおめて度纏つたといふ事なら、素直なあの子の事だものを、おばさんこふ〳〵で御座い升が、どふで御座いませうとか、悦んで下さいましとかいふに、きまつてる、それをあの通しほれてるのは、ア丶わかつた、あの子の心にも、澤部さんが今夜當りは判然ときまりのつく話をなさるだろうと、内々察してゐた處を、あて外れといふ寸方か知ん……、イヤ〳〵そんな厚ま敷すうさんでもない、ヒヨツトしたら、又これもお斷かも知あい、そういつて見ば、なんかしら言葉をかけて行なさる澤部さんが、今夜に限つて歸りがけにいやあお顔をおすつて、ツート人の居る處を通り過なすつたが、やつぱりそうかも知ないよ、それにしても澤部さんは人物だ、見識といひ品格といひ申分のないと、わたし斗りじやないみんあ人がそういふものを、あんぽすうさんが、素直で如才ない娘に似合ずこれまで緣談の事といふと氣むづか敷つて一向に取あはなかつたにしても、今度の事こそはよもやいあやはいふまいと、あの子の身の固まるのを樂みにしてゐたものを、……だが考へて見ると全躰わたしたちには、からきし分ないよ、今の若いものは、わたしなんぞは隨分娘を育て丶緣附もしたが先あたつて見と始にこそはまがわるいとか、いやだとかだ丶をこねてるけれど、つべこべいつてる間に、新敷晴着の二た重ねも見せてやろうもんなら、直いそ〳〵して始しぶつた時の涙なんかは、いつの間にかどつかへ行ちまふもので、若い中は、みんなあの通と、大呑込にのみ込でゐると、どふして〳〵今の若いものは大違ひ、イヤ交際だとか、自由結婚だとか、めんどうあ事斗り云つて、ちよつくらまとまつた話じやない、マア〳〵すうさんあんかは、一生不自由はしない丈の財産はあるし、人の評判じや學問も並勝れてるそうだから、い丶様だけれど、ア丶いつまでも無頓着に獨身でゐちや、母親でも生てたら、さぞ氣を揉むだろうよ……

此時天井のねづみの音ガタ〳〵チユー丶放神して茫然たりし婦人は急に心着、

オヤ〳〵うつかりしてた間に、あんかも何もつめたくなつちまつたよ、ア丶おはるや(下女の名なるべし)モウおそいから、しまつてお寐よ、……オヤ〳〵如才なくモウ白河夜舟といふのか、ドーレそんならわたしも締りでも見て來て

ねまちとしよふ。

✦ ✦ ✦ ✦ ✦ ✦

此座敷は、日本の八疊間を器用にしつらひて、西洋風の書齋に用ゐたる躰にて、從前の疊の上に淡泊なる毛氈を敷詰め、片隅には座敷に合せてチト大き過るといふガラス戸の書架を斜に据たるありて、これと眞向に西洋机を前にひかへ、今しもはね蓋をあげ、原稿紙を三四枚取出し、もの書かんと打案ずるが如き彼の婦人は、側なるスッウデントランプの女主の眼を忍びてか、ま深に傘を被りたれば、ほの暗くて、確と見定めがたけれど、其横向の顔を一口に評するに、いと品よしと云の外なし。凡そ形容して形容しがたきは容貌なるべく、讀者の常に玩味て不滿を感ずるも容貌の形容に於るなるべし、容貌を寫し得て其人を寫し得ざる者殆ど稀なり、若人を寫し得たりとせば傳紀者幷に小說家の職分は既に終たる也、されば總じて大家が容貌を寫す事のまゝ粗畧にして、漸くに卷を閉て始めて斯くと讀者に想像せしむるは、大に味なきにあらず、さていと覺束なけれど既に讀者に紹介したる婦人の形容を聊か試みんに、年頃は廿四五とおぼ敷、色は黑からねど、生白き質にてはなく、彼のオリヴ、カムプレクションとて東洋婦人專有の美色スコット翁作Ivanhoe中のリベッカの容色もかくと思起さるゝむきなり、ふさ〳〵としたる黑髮をズット後ろへとき落し低く結びしは其恰好よきつむりに便宜を與へ、締りよき尋常なる口もとは、婦人のよく己の位置を見識を維持し得べき凛乎たる覺悟を示せり、さりとて一喝の下に、懦夫を懼死せしむと云ふ、彼の空恐ろ敷女丈夫の輩とは、得もおもはれず、涼やかなる眼元は、憂は敷とにはあらねど、婦人の優にして沈着なるを思はしめ、現はに活潑とは見へねど、宴會の夜の雨、御琴の糸の切、何くれとなく心に叶はせられぬ事しあれば、味氣なき浮世かなと、詑させ玉ふ眞に味氣なきひめ君とは似つくべくもあらず。

既にして時計は十時を報じ、殊さらに忠實らしく、又新たに一週を始めぬ、婦人の鋭敏なる事は、今夜に限りて澁りしにや、不幸なる原稿紙は、行一行の埋められたるなく、いとむな敷おもゝちせり、ヤゝありて婦人は、少數かしらをもたげ、かねて思迷たりし難問を、斷然解し得てか、或は草稿にかゝる爲か、愉快なる思想の急に湧出てか、手早に筆を採りて走り書し始ぬ、かくて屹としたる口元に、どよめくさゝ浪は、春の日、湖水の面を眺むる趣きありていとこゝちよし。

開書

○忘るゝ勿れ女學雜誌記者よ　櫻田ひで子

女學雜誌記者は我國女流の辨護者たり其代表者たり安慰者たるは記者自らも之れに任じ世人もまた之れを許す所なり、而して女學記者が清操（センティメント）の高き自ら辨護の位置を取らざるべからざる女性の罪も辨ずべきは飽く迄辨じ責む可の點あれば大喝叱し去て毫末も假さず、況んや世人が同胞の姉妹を辱かしめ女性の進歩を妨げんとするに至ては奔雷怒濤の勢を以て之れに當り全身の熱血を絞り滿腔の鋭氣を發し浮薄の冶郎を筆誅し輕忽の徒を慚死せしむ吾人は深く記者が勇敢なるに敬服するものなり、而して記者が苦める膽める痛める姉妹に對しては慈母の如く天使の如く温顔笑を含で聖歎を唱へ優情手を携へて之を導き、涙を以て同情（シンパセー）の念を表はし、正旨以てこれを勵ます吾人は深く記者が心情の厚きを歎賞して止まざるなり、故に吾人は記者がます〳〵明治女流の爲めに其身を忘れ以て其信ずるの天職（ミツシヨン）を盡されんとを切望するものなり。

今や道義の感想は漸く我國女流の腦底に勢を張らんとす、而してまた此感想を失はしめんとし其道念を挫かんとするもの一にして足らず記者足下筆を政海に走らして正義公道を唱ふる固より可なり然れども記者よ便りなき憐む可きの處女が節操を破らしむるの人多きを忘るゝ勿れ、正體高潔の德を慕ふがために亂舞倒醉の社會に交はらずと云ふ愛孃を威によりて制御せんとするの父母あるを忘るべからず、學窓にある數年漸く讀書の快樂を曉るの女學生をして中途に志を破らしむるの頑迷なる老爺あるを忘るゝ勿れ、後進の女流に對し負ふ所の義務を盡さんとするの女子をして舊來の陋習を守て意なきの配偶を强ふるの老婆あるを忘るゝ勿れ。輿論は女子教育にの必要を揭言し喋々するも記者よ忘るゝ勿れ暗中に陷穽あるを、記者が筆頭百萬の女子教育論者を造りたりとも未だ天保時代の制御を恣にするの父兄多きを忘るゝ勿れ、女學記者よ記者が涙は向後一層の度を增さゞるべからず、記者が叱聲は未來に於て一層强からざるべからず、記者よ月明ならんとして雲翳先づ至り花盛んならんとして暴風來るは浮世の定理なり、夜來漸く笑を呈し朝露を帶て將さに薫香を放たんとするの薔薇花旭日の輝々たるを見ずして將さに狡童のために折られんとす再言す記者よ忘るゝ勿れ天眞の剛氣優情をして爾后一層我等女性の上にあまれからしめんとを。

文論

●女の文章は何如に作るべき乎との問、之は大ひなる問なれども一體女の文章と云ひて別に作り方はあるまじく矢張り男のと同じ作り方に據りつゝ扨て女らしき所ろは自然を顯はすが至當と思ふ、昔し假名文と漢文と分れたるより自然女の體、男の體と分れたるなれど西洋にても支那にても女の文章と云ひて別にあるは無し只だ男と同じき中に優しき所ある耳、夫故に女文章の作り方と云ふとはお答へせざれど先づ新井白石の書物を御覽になるが宜しからん、議論體ならば讀史余論、記事體ならば折焼しば、尤とも普通の者なり●米の直段は之よりも上るべきか否やの問、是又困却する問なるが古米は近年に無き程に欠乏し、其上へ本年の取實は一割以上二割方を減じたるに、田舍にては追々多く米を食ふ樣になりしゆへ米價は此上騰るとも下らじと云ふ說もあれど、又目今の米價は兩三年間の相場に比較し五割方高き故之よりも高くなるとはなかるべく、特に不作にて惡米なれば賣り急ぐもの多く、先づ〳〵直段は下る方ならんと云ふ說もあり、則ち今日の相場の如く上下不定なれど、先づ此上多くは騰るまじと思はる●西洋料理の仕方を手早く知る書物の問、先づクラゝ、ホイトチー女史の西洋料理方案内と云ふが宜しからん●みどり君へ、お尋ねの事は思ひ止め玉ふ方正當と信じます●山林と雨との關係の事前號の文にて尙ほ不分明なりとて方々よりの問合せあり、更に平易に言へば、山に木多ければ其木々の葉亦莫大なり、葉一枚は眞に小さき者なれど、一本の木に付き少くも數万より多きは數十万もあることゆへ、雨降りし時此の一枚〳〵に降掛る雨の點滴は皆な其の表裏に留まり容易に落るとなし、此れ些細なる如けれど大層の事にて之が爲め天より落る雨の中途に止まりて地に落ちざるは甚はだ多し、其の多き一證を擧れば、雨降るのみにては大水は出でねど雨と共に風あれば直ちに大水になるに由りて知るべし、之れ多くは木々の葉より雨が吹落さるゝに由る也、左れば山に木ありて木に葉繁れば降雨の急に下り流るゝを止むる所以を知るべし。扨又既に地に降り落ちし雨にても、山に木ありて木に根はびこり居るときは、此雨水半ばは地中に吸込まるゝゆへに流るゝ高は少なけれども、山に木なき時は其山ハゲ山なるゆへ、降りし丈けの雨は皆な急に流下し大水となるべし。又山に木あれば其根にて土砂を壓ゆるゆへ山の土砂は崩れざれども、木なくして山不毛なれば、土砂段々にくづれ落ち、流れ落ゆき川の床を高くする故、一朝水出るときは直ちに堤を破るなり。然るに又、雨と林とは近き關係ありて大抵雨は林ある所ろより降り出すものなり、而して林ある處ろより吹降りて、其雨量の中ばは斯して引止められ、地中に埋められ、然らざるも漸次にゆるやかに下に流るゝときは急激の大水とは爲らざるに、若し林なくして雨何處ともなく一面に降り下る時に於ては一時に大水になるは勿論なり。故に今年の大水は、堤の手入の屆かざりし譯もあらんが、其大元因は近年山々の林を濫伐して、山林と降雨との平均を失なはせ、樹木が氣候に對する天然の調和を破らせしが爲めと思はる。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

時事

廿二日脫稿

○同胞諸兄姉を和む

日本人元來愛國の情に富めり、今日國家最大の問案に臨みて、何人か純正潔白なる愛國心に刺激せられざるものあらんや、彼の陳腐暴論に逆らつて條約改正すべしと斷言するものも固より愛國者なり、彼の多感頑陋の名を買はせられて敢て條約改正中止すべしと剛談するものも亦固より愛國者なり、嗚呼三千九百万の人は皆な同胞なり、特に今ま尤も國事に痛論するもの豈に密親なる兄弟姉妹にあらざらんや、此時に於て諸君互ひに其の本心を疑ふ可らず、彼も至正より發し、我亦至正より發す、不幸にしてたゞ論解見識を異にすといへども豈に他あらんや、揭告す全國の親愛する兄姉諸君、請ふ暫らく情を靖くして密室に入れよ。

○沈思三省

密室に於て沈思默想す、「吾が言固より如此し、然れども其言或は人を誤まるなき乎、吾は道理によりて之を非とする耳、然れども此の論を聞き暴行によりて之を非とするもの出るなき乎」と。彼の熱心なる文章は賞すべし、然れども熱心其度を過ぐるときは、過激となり、過激文章の過激者に讀まるゝときは其害や不測ならんとす、吾人は一二の斷行論者の如く此際中止說新聞紙の意思を責むるものに非ず、只だ向后其文章の穩やかに其本思を現わすにのみ止まらんことを祈る。

○目的と手段

何如なる正大の目的なりとも、若し正大の手段を以て假行せざれば正しきを得ず、凡そ事其結果によりて善惡を判すべしとは古來亂臣の言前となり、盜賊の遁辭となり、遂にジエスウイト宗派の信仰となりて今は悉く其非なることを自證したり、善はたゞ善に由て成し遂ぐべし、惡手段を用ひて善望を遂せんとするは猶ほ泥に沒して上天せんとするが如し、況んや其目的すら最初より惡なりしに於てをや。

○泥棒及暗殺者

鼠子偷は惡善主義を以て泥棒をしたり、若し暗殺者を賞せんと欲せば鼠子偷をも賞すべし、日本の輿論は倘ほ如此きものを容るゝ乎。

○暗黑に入れ

一派の新聞紙は切りに來島恒喜が生前の行狀を賞め、更に一派の新聞紙は切りに之を惡く言へり、吾人は如此き雜報は一切野蠻的新聞にでも載らんことを望む、況してや之が寫眞を揭げて探報の迅速を誇らんとするものに於てをや、嫌惡無極、吾人は總べて如此き兇徒一身の記事が全く暗黑裏に沒せんことを祈るもの也。

○兇徒の死躰

村上、中西、櫻田の三氏其下渡を出願したり、抑そも此の死躰は何如にして葬られんとする乎、之を大行に、目立がましく、送葬することは固より不可也、之を公共同用の墓地に葬むることに付きては亦異論なき能はず。吾人は元來彼の嶋田一郎、高橋お傳、西野文太郎、鼠子偷、等の墳墓を公衆の目に觸れしむるを嫌ふもの也、況んや之を吾人が尤も敬重する義人、正人等の墳墓に並ばしむるをや。吾國未だウエスト、ミニスター、アツベーあらず、然れども既に盜賊亂子の爲に立派なる墓地あり。

○嗚呼幾多の人才

嗚呼幾多の人才が誤まつて非命を遂ぐる、啻に其才德の伸びざりしのみあらず、万世の醜名を荷ふて死せり、歎ぜざる可けんや、然れども此の一個の人才を惜むものは更に百の人才を惜まざる可らず、不道を爲せる一才子を惜しむものは、異日千の才子をして不義に死せしむることを覺悟せざる可らず、孔明淚を揮つて馬謖を切る、堂々たる君子は細慈に泣くものに非ざる也。

○大隈伯北堂

朝野新聞に曰く、

大隈伯爵の北堂には八十七の老齢にをはせば、世間の騷しき事などは成丈け秘して心配されぬ樣にと、付の人々常に注意しゐる由なれど、何時も何處よりか聞知し居らるゝにや、兼て或る懇家に托して自身の油畵を誂らへ居られたるに、先程其許に參られ「國家大臣の職に居る悴の事なれば、身を抛うつて國事に盡すは本より覺悟の事にて實に今日ありて明日なき身なれば、斯る騷しき世に在りて我が繪像を造るは奢侈に属すべく、又造りたればとて身を國事に抛うち居る悴の事なれば、我に先だたんも知らざれば、繪像は見合はすべしとて、斷はり歸られたるよし。何人か感泣せざるものぞ。

○大隈伯夫人

又た大隈伯爵夫人の聰慧鋭敏なるとは兼てより世人が傳唱したる所ろあるが、此度の事變によりて一層夫人の氣丈なるとを證したり、高木醫伯先づ之を診し、他の國手亦之を斷し、最早伯の右足を切斷するの外なしと定まりたれど、之を許容保證するものなくては手術を施こしがたく、其時寸秒の間をも爭ふに際し、夫人は毫末も猶豫する所ろなく直ちに斷答したり、之に由て手後れなく施術十分に成れり。其他此の大變に際し、万の來客に應接し、待謝し、且つ伯を厚くいたはらるゝとの周密なるには、尤も近侍したるものすら其非常なるに驚服せりと云へり。曩には森子夫人あり、今亦た大隈伯夫人あり、實に前后の兩慘事に對する、一双の秀閨と云ふべき哉。

○女子青年會

青年會と云へるもの近來所々に起れり、然れども多くは男子の青年會にして未だ女子の青年會と云ふはあらず、聞く米國ニウヨークに本部を置ける彼地の女子青年會の如きは、女子の爲に書籍館を開きて自由に新書雜誌を閲覽せしめ、又さまゞの教科を設けて無代價にて貧民の娘に教へ、手數料を要せずして女の奉公口を世話し、安固なる下宿室を備へて女性の住居に貸し、遠來の女客に案内を爲し、四方の問合せに信切に答ふる等、大凡そ女子青年の利益となるべき事を無料にて成るべく鄭寧に盡し、只管ら女性の便利幸福を計ると云へり、而して現今の紐育基督教女子青年會は東第十五街に五層樓の大事務所を設置し、五千卷の書籍を藏し、廣大なる會堂を備へ、速記、繪畵、裁縫、寫眞其他數多の技術を教授する數多の教場を置けり。然れども十八年前「基督教青年分會」

の名を以て其の初めて出來したる時は、小き集會所、五百部の書籍、三十八人の會員、給料を拂はれたる唯一人の書記のみにて成立ちしが、爾來年々に隆大して遂に今日の如き盛況となれり。嗚呼今の女學生諸君其同志者少なきの故を以て其の力量多からざるの故を以て初めより絕望する勿れ、後年の大流は今日の細流より起る、諸君乞ふ一考せよ、努力せよ。

右靑年會五層樓の圖、並に裁縫教場の圖を別紙に附せり。

○事小なるに似たれども甚だ吾邦の躰面に害あり

と題し、加藤弘之氏が天則第八號に論述せられたるは甚はだ贊成なり、日本人の著書に一八八九と年號を記し、英和學校など英字を先きにし、基督教的學校に於て大祭日を祝せざるとある如きは何れも不都合なり、特に基督教の宣教師等が本邦の大祭日の一二を目して偶像教の祭日となし頓着せざるとあるは、無禮も亦極まると云ふべし、凡そ此如き行爲は事甚はだ小なる如くして書生の氣風に關する甚大なれば、爲めに宣教師の設立に係る學校に日本國風の消滅するとあり、此等の事は正義を主とするもの丶特に注意すべきもの也。

序でにより加藤氏に申す、氏は獨逸文を以て其卓論を公けにせられんとすと、昔しケプレル、ライプニッツは多く羅甸文を以て記述し、フレデリック第二世は佛文を愛讀したり、故に前世紀、ゲーテ、シルレル等が獨逸文字を以て獨逸國文章を記するに至るまでは遂に獨逸の大文章を得ざりしに非ずや、氏亦た本邦文學の爲めに變ひて可也。

○上野馬見所に注目せよ

今日の騷がしきに連れて人の注目せざるは、上野馬見所に開かれたる明治美術會の展覽會なり、然れども、其出品の甚はだ少く、其評判の左程にも無きに拘らず、之れ大ひに注目すべき價値あるもの也。田崎延二郎氏が摸寫に成る裸躰美人の圖何んぞ高麗なる、今の徒らに曲線配合を名とするもの就覽して醜死すべし、同じく氏が作なる夏朝小室の圖、庭木鬱蒼、幽與閑雅なる所ろ、琴机靜列するの樣何如にも奥床し。佐久間文吾氏が豐年の圖、村娘が衣裳に誇り、古莊屋が愛兒を伴ない、若い者が群團し、旦那が婿を連れ、ノボリが優々温々として飜がへるの狀寫し得て甚はだ妙なり。小泉成一氏が平家の軍兵南都に亂入するの圖は、結構布置中分なし。如此く油畫の艶麗なる間だに、渡邊微山氏が淡々洒々たる筆に成れる數幅の畵は極めて鮮新の感を與ふ、特に其長江月流の圖は、月色淸白、遠山糢糊、岸樹淡鬱として、吾人をして甚たく淸冷

の感に絶せしむ、嗚呼是れ多くは皆創作なり、本邦の畫すでに斯迄に進めり、賀せざる可けん哉。

○畫中の精神

無意味の事物を實際のまゝに寫したるは、以て繪畫の細巧あるを證す、然れども未だ之を以て高秀なるものと爲す可らず、例へば小山正太郎氏が栽日元寇役來の后景を寫されたるものと、今同山村嫁女の躰を寫されたる者とを比較し、其高下の別何如を知るべし、吾人は繪畫の只だ一技、一遊藝として止まらんことを欲せず、彼の道念純潔なるアンジエロの思想が其筆によりて活寫せられたる如きに至らんことを祈るもの也。

○油畫と日本人

油畫の筆法は固より西洋より傳受したりと云へども、之を畫くものは日本人の思想ならざる可らず、吾人今の油畫に於て日本人の思想を認ためずと云ふに非らず、然れ其試みに問はん、何故に油畫に於ては悉とく作者の名を洋字にて記す乎。

○加藤弘之氏の進化論

「兎角物事は潔白なる事のみにては出來ぬもの也」と云ふの一演說、氏が平生の進化論に矛盾するに似たり。夫れ人間は善念惡想を混抱するものにあらずや、然らば之が行爲の上に善の思想より成るものと惡の妄念より起るものとの相混ずるは當然の事なり、孔子曰く善を見て行ひがたく惡を見て去りがたしと、然らば孔子の言行の中にも善惡の二種を混じたる也。但だ夫れ其善惡相鬪ふて何れか優勝劣敗し、之が行爲の決果に於て善を呈せば之を善人となし、若し不幸にして惡を呈すれば則はち惡人となるのみ、孔子の如きは則はち其の決果の善に非りたるを以て聖人となれり。左れば奴隷廢止に於て北部の人民に幾多の歿しき心情もありしと雖ども之を奬勵したる總べての原動力が悉とく惡念にてありしと思ふは大に誤まれり、或は演說に泣き、或は著書に咽せび、義人之が爲めに奮立し、勇將之が爲に身を献ずるに至りたるは、總べて奴隷を廢せよと云ふの味方にありて南部諸州に在ると少かりしに非ずや。吾人は總べての善決果が悉とく善因よりのみ來ると云はず(或意味に於て)、然れども惡因紛々たる間だに善因最適し、遂に適種最もよく生存して彼の美なる決果を現ずるを見れば、優勝劣敗の道理によりて善の常に優者にてあるとを認ためざるを得ず、故に荷くも道德的進化論を悟るの徒は畢生滿腔の力を盡してたゞ此の大勢に助力せんことを祈る。加藤氏が此の演說の如きはたゞ歴史を講ずるにありや若くは時世を

擁するに在りや、苟くも時世の爲にすと云はゞ氏が意見の反つて現今善進の方向に害あらんことを恐る。

○荊棘より葡萄を得べき乎

奴隷禁止とは是れ博愛仁慈なる善心の一現象なり、歐洲列國に於て第十世紀より第十三世紀に至る迄で奴隷使雇の殆んど滅絶したることは主として基督敎の感化に據れり、後ち佛國に於て、次に英國に於て、次に諸列國に於て、其の殖民地に於てすら奴隷を使雇す可らず、貿易に於てすら之を賣買す可らずと宣言せしめたるものは多くは善人の聲なり、彼のウイルバーフォースの如き、トマス、クラークソンの如き、議員バックストン、バッシー等の如き豈に偏見邪望によりて奴隷廢止の事を論ぜしならんや。　而して歐洲に於ける奴隷禁止の輿論遂に米合衆國に入りし以來、一旦不幸にして南北分戰するに至りしと云へども、一千八百六十三年一月一日大統領リンコルンの手によりて彼の大名譽ある奴隷解放の布告發せられたる迄で、多くの廢止會、多くの禁止會、多くの政治上の非奴隷會設立せられたるは豈悉とく偏見邪望によりて出んや、彼の「總解放精神」「ゼ、リベラートル」等の書籍雜誌は果して惡意によりて成る乎、米國非奴隷會、ガリソン黨禁止會、米國外國非奴隷會等の設けられたるは果して惡意に由りて成れる乎、プルーデンス、クランダル女史が或は囚牢せられ、或は其學校を破壞せられたるに關せず毅然として黑人を敎育したるは果して惡意に由りて然る乎、ハリエット、ビーチエル、ストウ夫人が慘澹たる黑奴虐待の景況に感激して其の秀高なる一小說を作り、以て全米三千民の良心を動かしたるは果して惡意に由りて然る乎、豈に唯に之れのみならんや、彼の開祖の大統領ゼヲヂ、ワシントンが其召使へる奴隷を放ちたる以來、ゼファソンの如き、マヂソンの如き、ヘンレーの如き、メーソンの如き、ラウレンスの如き、若くはヘンレー、クレーの如き、チャーレス、カルロールの如き、皆な是れ南部諸州出身の人に非ずや、而して其夙に奴隷を非とし、若くは熱心に外國奴隷移住の事に加擔したる如きは豈に決して惡意に由らんや。加藤氏の說の如きは、玻璃宮の建立に一醜土を混じたるを見て、全玻璃宮悉とく土芥より成れりと云ふが如し。

○蒙古人乎

日本人は果して蒙古人種なる乎、吾人はコロボックルの日本原人たるを知り、アイヌの蝦夷人たるを知る、然れども日本人の果して何人種たるを知らず、彼等果してバビロンの散民たる乎、若くはアカド國の亡民たる乎、若くは支那蒙古人の渡來したるもの乎、吾人未だ之を知らず。然れども假りに之を蒙古人種なりとせん、然らば蒙古人種たるものは何故に大學に入るを得ざる乎、彼の博愛大量、能

く蠻人をも教化すると云を以て誇る米國人民にして如此き狭見偏僻に陥いり、果して何の面目ある、况んや日本人未だ必らすしも蒙古人種たらざるをや、故に吾人は彼の吉川殿氏の立論に同す。

〇大學生

は宜しく時事を論辨すべし、之を政治談として論ずるに非す、政治學談として論ずべし、兎角學者は迂濶に陥り易し、之を防ぐは時事を論辨するの外なき也。植物學者は草木に接し、動物學者は動物に接し、生理學者は人身に接す、豈に政治學者のみ政治に口を箝くるを得ざらんや。

〇十津川の窮民諸士を送る

大和十津川郷五十七ヶ所の人民は都べて士族にして、其上み勤王誠忠の武勝に切なりし由縁（ゆかり）今に消失せす、済風穏々として今日尚ほ昔習の薫（くん）しけるに、不幸にも本年の大水は此等の渓地を浸し了り、田地家宅悉とく流滅したり、左れば三千余人の窮家族は相携へて北海道に移住せんとし、其の一千人は去る十八日既に出發したりと。嗚呼北海道は廣漠にして沃野万里に連なるの地なり、我士亞北に窺がひて日本帝國の要門たる地なり、諸君茲に移る、願くは身躰を健やかにし、年來の武勝を輝やかし、眞に一新强地を此處ろに拓きて我帝國の頭脳を固く擁護せられんとを、時正に冬に向ふ、諸君自愛せよ。

〇英雄崇拜

曹操曰く、吾は人に異りし所ろなし只だ智慧あるのみと、然れども人の智慧も左程に優劣あるものに非ず、吾人嘗て日本橋邊を徒歩したり、其翌日試みに馬車に乗りて同所を馳らせたるに、風景氣分雲泥の差ありき、我れながら既に然り、人の我を見るは亦一層の違ひありしならん、世上何の所ろに英雄ありや、台所ろにもあり、下宿屋にもあり、雲の上にもあり、到る所ろにあり、故に一種變はりたる英雄は到る處ろに無し。

〇豪傑の心事

辭職の朝迄で人に洩さゞりし、其前日は靜かに碁を囲みたり、其當日は牡丹を觀たりと、此を以て直ちに大豪傑の余話なりとせば、吾社中の小僧にもあり。

〇英雄を知らず

然るに之と同時に大人の胸臆を計つて寐言の如きを並べるものあり、苟くも英雄として尊さむならば宜しく英雄らしく待すべし、頑婦が否だ〳〵とスネル如き情を以て大臣の心中を忖る、恰かも井中の蛙が天の雲色を評するが如し。

〇小學校教育品展覧會

東京府教育會に於て開設したる此會は、教員及生徒の爲に有益なるもの也、教員は之に由て其の親切の度、注意の度、管督の度を比較するを得、生徒は之に由て其の學力、勤惰、榮辱の度を比較するを得、吾人が此上に熱望する所ろは、審査委員が鄰導周密に比較して、公平明白に優劣を判せられんとに在るなり。

〇東京書籍組合商の水害救恤義捐會

九月廿二日より三日間木挽町厚生館に於て開かれ、賣上高の内を以て三縣下の水害罹災者に捐出せる者にて、教育時論第百六十二號に出れば決算書左の如し、

出品總賣高	二二五〇、〇八三
收入	圓
右二割金	四五〇、二三八
閉會不用器具賣却	七、七九〇
合計	四五八、〇二八
仕拂	
割戻（此は二割金收入の内より舶來書籍及び官廳其他の委托品は義捐金を一割させしに付其半額を販賣者に返附す）	一一六、九一四
諸新聞廣告料	三四、五三〇
開會準備費	四八、六五四
會場諸費	七七、一九三
義捐金	一八〇、七三七
合計	四五八、〇二八

之に據れば東京書籍組合商五十名の方々は、其の三日間の辛勞と賣上高の二割とを義捐せられたる也、而して其の賣價は定價の何割引に當るやを辨知しがたけれども、總べて卸賣には店前普通の賣價よりも更に二割三割若くは四割を減ずるの仕來りなれば、此日一齊に其二割を義捐せられたるは必らずしも方々の損となれるには非ず。扨て入費の部に會場諸費及開會準備費の合計より不用器具賣却代を差引くときは都合百十八圓〇五十七錢は入費として消費したるもの也此額決して少しと云ふ可らず、吾人は此組合の方々が慈善心に篤きを信ずるが故に、如此き入費の支拂口々迄で世上に明白とあり、更らに明らかに諸君が辛苦の程を知了するに至らんとを望む。

●女報

○東京慈惠醫院幹事　毛利公爵夫人、一條公爵夫人、鍋島侯爵夫人、山縣伯爵夫人、松方伯爵夫人、三好子爵夫人、樺山子爵夫人、高崎男爵夫人、九鬼夫人、岩佐夫人の十名は去る十六日皇后陛下より來る明治二十三年度東京慈惠醫院幹事を仰せ付けられたる由。

○女子の建白　本所區緑町一丁目二十六番地に寄留する裁縫教授業川口空井氏は女子五十名と連署の上條約改正の中止を元老院へ建白せんとて昨今調印中なりと云ふ。

○成立學舍女子部　にては本月下旬學期試驗を終り高等科本科幼年科等へ入學を許す由なるが今度卒業すべき生徒は二十餘名の卒業證書授與式は來年四月の紀年會まで延期するよし云ふ。

○女子職業學校　にては近日校友會を催し生徒の製造品を陳列して衆人の縱覽に供し所望の者へ賣渡す見込なる由。

○伊藤伯爵夫人　は大隈伯遭難の當夜樞密院書記官津田道太郎氏と共に霞ヶ關の官邸を見舞はれたり。

○女子師範學校　にては明治二十三年四月女子師範學科生徒二十五名試驗生として募集せらるゝに付き該女子師範學科二ヶ年以上の課程を卒りたる者若くは之に均しき學力を有する二十才以下の女子は本月三十日迄東京府廳へ申出づべしと。

○看護法練習證明書授與式　去る十一日第一醫院に於て看護法練習證明書を得られたるは左の諸氏なりしと

代とめ子、小日向きく子、篠崎はる子、長谷川まさ子、河島いく子、月崎つる子、福島せき子、駒井まさ子、安藝てつ子、田口つる子、中村りん子、清水くめ子、志村すゞ子、森やす子、池田けい子、林花なを子、建部くら子、荒山こと子、岩瀬とも子、堀とし子、保田はる子、中尾ひさ子、田中きみ子、活野井たす子、川俣やゐ子、山田れい子、石川とめ子

○秋田婦人學會　は晩年篤志の婦人に實用の學科を教授するの目的にて秋田市四學校の女教員諸氏の發起にして青山縣知事夫人も入會して專ら周旋せらるゝ由なるが漸次に盛大に赴く見込ありと云ふ。

○女教師の集會　西京下京區内の各尋常小學校の女教師二十餘名は去る十七日同區修德小學校に集會して授業上の協議を爲したる由なるが爾來每月一回乃至二回の例會を開き各自の意見を提出することに決したりと云ふ。

○八幡紡績會社　京都府下綴喜郡八幡町に設立したる紡績會社は大阪の小林八郎兵衛氏の發起にて資本金十万圓を以て本年四月より試業に着手せしたが追々事業も盛大に向ひ當時は八十馬力の紡績器械と二千の錘を用ひ日々の紡績高は二百貫目づゝなりしが近日更に男工三十五名女工百五十名を募集し電燈を据付け工女を晝夜の二部に分ちて各其業に從事せしむることになすと云ふ。

○新誌

日本　十六日　當局者の覺悟如何●十七日　伊藤伯の辭表●十八日　内閣分合論●十九日　輿論の解、條約問題

政論　十六日　北海道の未來●十七日　現今の最大急務●十九日　伊藤伯の辭職●二十日　大隈外務大臣の遭難●二十二日　改進黨の自家撞着

報知新聞　十六日　土地所有權●十七日　前接●二十日　大隈伯の變事

時事新報　十六日　東京商工家諸氏に告ぐ●十七日　内閣の方向●十八日　十六日の續●十九日　前接●二十日　悪習慣を作る勿れ●二十一日　大隈伯の一身●二十二日　大隈伯の内變、外國人の感情

毎日新聞　十六日　内閣諸公に望む●十七日　百怪滿目●十九日　御前會議●二十日　何人か其責に任ずべき乎●二十二日　暗殺は外事に關する者多し

日々新聞　十六日　伊藤樞密院議長の辭職●十七日　前接●十九日　京都行幸御延引●二十日　大隈外務大臣の遭難●二十二日　先づ臨時外務大臣を置かるべし

東京新報　十七日　現内閣を奈何すべき●十九日　内閣の再組織

朝野新聞　十六日　内閣と伊藤伯●十七日　世人の思ふ程にはあらざるべし●十八日　學理的講究の説●十九日　目下の急務は内閣の結合一致を謀るに在り●二十日　外務大臣遭難●二十二日　前接

讀賣新聞　十六日　伊藤伯の辭職許すべきや否や●十七日　内閣には異論の大臣ある可からず●十八日　樞密院議長の後任は誰ぞ●十九日　これを以て政黨内閣の端緒と爲せ●二十日　暗殺は國家の恥辱なり●二十一日　大隈伯遭難の條約改正談判に及す影響如何●二十二日　前接

●初刊

人　間　松江基督青年會隔日一回發兌一冊四錢

貴女之友　從來月三回發兌を月一回發兌に改む

いらつめ　月一回發兌なりしを四回に改らたむ

婦人世界　京都令徳會雜誌部月一回發兌四錢宛

北陸婦人教會雜誌　金澤婦人教會本部月一回宛發行

利國新誌　月二回兩替町利國社發兌一冊十錢宛

○「人間」題してヒ、ヒウマンと云ふ其第一人去十五日發兌せらる、基督教青年會的の議論にして文章活氣あり談論清し○貴女之友は女學叢誌の一變したるものにて、吾れ女學雜誌と競爭したる最古の女雜誌なり、然るに今ま月三回發兌なりし

次號には明宮殿下の御育儀並に博士小中村清矩氏の立皇太子の說を載すべし

を一回に改む、實にさびし○之に反し「いらつめ」は回數を增したり、優雅風流なる此櫻にして前よりも屢ば顏を出すと云へば愛顧するもの多かるべし○「婦人世界」は精神的の敎養を主とする目的にて發行せるもの丶由にて專はら佛敎風の議論を載せたり○北陸婦人敎會雜誌も亦た同樣のものにて主も佛敎者の婦人論を載せたり○利國新誌は渡邊洪基氏を隊長とし所云る國際的經濟論によりて國を利せんとする人々の論を載せるもの也。

○時事新報、大隈伯の一身

時事新報の社說は何んぞ巧妙溫秀なるや其の廿一日の紙上に於ての「大隈伯の一身」を論じたるもの丶如きは、文短にして趣むき無量なるものと云ふべし、曰く大隈伯は條約改正の局に當りて種々樣々に苦心する折柄十八日思掛なき災難に罹りて生命を失わざりしは眞に僥倖なれども大手術を施こされて僅に命を全ふしたりと云へば死して復た蘇生したるものなり其身國事の爲に無上の災に罹りて幸に政治社會に再生し人生の最大幸福たる身躰の不自由を致しながら尙ほ國事に鞅掌すとあれば他人は自から伯の身の有樣に對して聊さか會釋する所るなきを得ず左れば今后伯が政治上の働きは身躰と共に動搖し又衰ふべきにあらずして反て從前に比して其言は却つて政府中に行われ易きの事情あるべし」と、如此き人情に至適したる文章の政治新聞に現わるゝを見るは女學上に於て吾人が尤も祝する所也。

○報知新聞、大隈伯の遭難

時事新報の之を說くや老翁、孫に談ずるが如し、報知新聞の之を說くや忠臣、君を慰さむるが如し、其二十日の紙上には君字二十五を散布して、杜少陵が嚴武を送るの句に初め、憲宗裴度の委托信任によりて、大勳を成せる叙事に終る、文章嚴肅方謹、遠く漢の頌德表を捧讀するが如し、嗚呼報知記者の如きは、能く大隈伯に信服して而して敢て瘦さゝるもの也。

○「文」雜誌、勝伯の戊辰の記錄

「文」は猶は雜誌中の官報の如し、其記事の斬新秀妙ならざるは暫らく言はず、其說話の確實鄭重なるは衆雜誌中に比類なきもの也、就中此比る連載する勝伯の戊辰の記錄の如きは多く得難きものならん。吾人つれに勝伯の文章に服す、特に其忠誠誠直にして飾らざるに服す、世の英雄は多くは物にビックリせざるマ子す、然れども勝伯は常に歎息、泣血、慚忸、言ひがたし、名狀しがたし、口述す可らず等白狀せり、是即はち伯が他人に優る所る歟。

週報

○宮廷　去る十五日聖上には內閣へ臨御あらせられたり●去る十六日宮中に於て授爵式を行はせられたり●去る十七日神嘗祭に付き宮中に於て御式の通り神宮御遙拜及賢所御親祭を執行はせられたり●皇后陛下は去る二十四日上野公園日本美術協會內に開設したる小學校敎育品展覽會へ行啓あらせられたり●葡國皇帝崩御に附去る廿一日兩陛下より電信を以て御弔詞御發送遊はされたり

○政治　去る十五日黑田、大隈、山縣、松方、山田、西鄕、大山、後藤、榎本の諸大臣は內閣に參集して御前會議を開きたり●同日樞密院にては新條約案に就きて院の意見を諮詢せらるに依り寺島副議長始め各顧問官參會して會議を開かれたり●同日板垣伯は一封の封事を奉りたり●改進黨は遊說員を京坂及び山陽山陰地方に去る十六日出發せしめたり●黑田總理大臣は去る十五日井上伯の許へ電報を發し歸京を促したり●去る十八日諸大臣は內閣へ參集して會議を開かれたり●大隈外務大臣は去る十八日午后四時退朝の途次兇徒の爲に負傷せり●去る十九日黑田、山縣兩大臣は參內して何事か奏上したり●伊藤樞密院議長は大隈外務大臣の見舞として去る二十日小田原より歸京したるが御召によりて同日參內御前に伺候したる由

○外交　大島淸國全權公使は去る十五日赴任せられたり●米國公使スヰフト氏は伊藤伯の辭表を提出せられしに付き黑田、大隈兩大臣に其要項を質し去る十五日詳細なる理由を本國に通知したりし由●橫濱駐在獨逸副領事フチン、シヘリング氏は去る十五日米船にて歸國せり●葡萄牙王ルイ一世は去る十九日薨去し太子カーロス王位に昇りカーロス一世と稱せらる

○宗敎　西京知恩院にては去る三日より本山維持の爲め信徒會を開きたり●芝區愛宕町二丁目に過般來建築中なりし芝敎會々堂は工事落成したるを以て去る十九日獻堂式を執行せり●去る十七日西京知恩院に於て帝國高等哲學院の開院式を執行せり

○美術　大日本園藝第二回品評會を去る十五日上野公園地內の第三回內國大博覽會々場內に於て開會せり

●會社　日本水產會社は去る十四日臨時總會を開き同社將來の方針を協議したり●東京灣汽船會社は東京灣及び近海各地方の往復を爲す目的にて此ほど東京府廳より認可されたり●舞鶴鐵道會社は已に不認可となりしより一旦之を解散する事に決定したり●關西鐵道會社は草津より甲賀、三雲までの間は既に落成せしに付き來る十一月中旬より開業する由●筑豊鐵道會社は線路實測も已に結了したるを以て本免狀下附を出願せる由

○銀行　第三十三國立銀行は日本橋區兜町の壬午銀行と合併の許可を得たり●川田日本銀行總裁は大坂の同行支店及び京坂地方の景況視察として出發する由

○雜報　東京新報は本月十七日刊行の記事中治安に妨害ありと認められ去る十九日發行停止を命せられ日本新聞も同樣十九日發行を停止せられたり●東京公論は去る二十一日より解停せられたり●安濃新報第五十九號は治安に妨害ありと認め自今發行を停止する旨其筋より達せられたり●東京新報は去る二十日發行を停止せられたり●日本人及保守新論は去る二十日解停せらる

●騷動　越中魚津の貧民は生活上の困難なるより去る十二日三井物產會社の米積取の滊船に暴動を働きたり

廣告

女學雜誌は明治十八年以來引續き發兌し當今既に一百八十四號の號數に達し毎土曜日に出版して早朝より全國に配達致候事。

女學雜誌は上み皇后宮陛下を始め奉り宮內省女官御中、貴顯高爵の貴婦人御中、は固より全國各地の諸女學校にして一部以上購讀せざる所は無之其外女教師女生徒の方には申迄も無く凡そ中以上の婦人方即はち新聞に注意し世の中の進歩に心を掛けらるゝ向の女流は大抵女學雜誌を以て交際上の話しの種と致さるゝ程にて其外此等の女性に同居する各父兄弟兄は固より男子の方々にて女學に熱心の諸君及び教育に從事せらるゝ諸氏は孰れも購讀有之候事。

女學雜誌は婦女子に關する雜誌新聞中にて尤も舊るく尤も勢力あり尤も發行の度數多く且つ尤も賣口多きものなる事。

女學雜誌は美術を重んずるの雜誌なるに付讀者も亦た毎號之を大切に保存して十冊毎に奇麗に合本とし永久に愛讀せらるゝ者多ければ之に廣告せらるゝは其日限りの新聞紙に廣告せらるゝとは相違多かるべき事。

女學雜誌は普通の雜誌類と違ひ右樣特別の性質あるものなれば取分け左の如き事物の廣告を公けにせらるゝには此の雜誌に命ぜらるゝと最上の御便利なるべき事。

婦女子に關する書籍出版の廣告○婦女子の好みて讀まるゝ如き書物例へば小說詩歌文章美術遊藝等に關する書籍の出版廣告○衣服、調度、髮かざり、化粧品、食物菓子の類、又は賣藥、寫眞、繪草紙等凡そ婦人方の身の廻りの品物は固より一家の經濟向に入用の品々廣告○物見、遊山、温泉、寄席、しばい、料理屋、貸屋、賣家等凡そ婦人方の好ませらるゝ事及び其の尤も注意せらるゝ事の廣告○奉公口、召抱、うば、等の廣告。

九段坂上　女學雜誌社

●德富猪一郎君序●

●田口卯吉君演說筆記●

條約改正論

●價六錢、郵稅共八錢（五厘郵劵代用不苦）

發行所　東京市京橋區彌左衞門町七番地　**經濟雜誌社**

和歌山奈良兩縣下罹災者
古着施與廣告

噫可憐哉今ヤ寒風冽々膚ヲ侵サントスルノ時ニ當リ之レヲ防グベキ一物ダモ有セズ唯呆然トシテ悲歎ノ外ナキ彼和歌山奈良兩縣下災害地ニ於ケル窮民ハ果シテ如何スベキ吾儕之ヲ思ヘバ惻怛措ク能ハズ猶然起テ情愛ノ兄姉ニ訴ヘ之レガ救濟ニ從事セントス依テ左ノ法方ニ從ヒ古着類古蒲團等凡ソ彼地ニ於ケル極窮者ガ一時防寒ノ用ニ充ヲ得ベキ不用品ノ寄送ヲ乞ヒ施與ノ媒介ニ任セントス

一　寄送品ハ十一月二十日限リ築地入舟町河岸通聖保羅教會內明教小學校ヘ御屆ケ被下度同所ニ於テ午前八時ヨリ午後六時迄受取方可取扱候

一　教會學校會社等ノ有志諸君ハ可成御取纏メ御通知被下度左候ヘバ時日ヲ定メ當方ヨリ受領人可差出候

一　右ノ御通知ハ麴町區有樂町三丁目一番地河島悌次郎ヘ宛御申越被下度

一　物品受領ノ節ハ聖保羅教會ノ捺印アル受領證ヲ差出スベシ

一　若シ其證ナキ受取人等罷出候トモ一切御渡被下間敷候

一　右物品ハ大坂基督教青年會ヘ依托シ被害者ヘ施與可取計事

一　右物品大坂迄ノ運送賃ハ日本橋區新材木町青木回漕店青木齊吉氏幷ニ町萩原運送店田中五平氏等ガ特志寄附ニ係ルト雖モ荷作取纏等ニ多少ノ費用ヲ要スルニ付特志ノ諸君ハ金錢ヲ投シテ助成セラレンコヲ乞フ若シ殘餘アラハ大坂青年會ニ於ケル取扱ノ費用ニ加フベシ

一　右事務結了ノ上ハ寄送者ノ姓名幷ニ施與ノ景況等基督教新聞紙上ニ記載シ委細御報知可致候

十月

聖保羅教會有志者

●婦女災害義捐金寄附者姓名

金八十七錢　各地方へ　婦人矯風會慈善音樂會殘金

同五十錢　同　麴町區飯田町明治女學校　神中いと子

小計壹圓三拾七錢

合計二百五十四圓七十七錢

遞信省認可

歐米製小間物大勉強大安賣廣告

御婦人用リボン　御婦人帽子用駝鳥羽類　絹皮上等手袋
ゴム上製櫛弁に簪類　絹綾縫取リンテルハンケチ品々
上等粧用花類　男女帽子類　上等毛織肩掛膝掛類
佛國ピノオ製香水香油　英製上等ナイフ　御婦人用服地
上等毛靴下　大小莫大小毛繻袢股引　其他小間物數品

弊店儀從來歐米各國の小間物類營業罷在候處幸に各位の御愛顧を蒙り日増に繁榮仕り難有奉謝候就ては今般追々冬季に向ひ種々新荷着仕候間諸品とも凡て正札付にて極廉價に販賣仕候元來弊店に於ては塲違摸造品等は一切無之爲めに當港居留外國人は外國館小賣店を差置き弊店品質の善良と價の廉なると誠實なるとを賞賛し日々御來車御需に相成又內國は高位の貴顯紳士令孃方を初め各學校の女生徒方に至る迄態々東京より御來濱被遊弊店へ御用被仰付候間猶一層御高評の程奉希候譯て本年は御婦人用**流行の洋服**數種新着仕り候間何卒御需の程偏に奉願上候也

二伸東京御客樣にて御需に相成候向へは金高に應じ品名御通知被下候はゞ種々持參上京可仕候也

横濱市境町一丁目
西洋小間物商　近江屋榮太郎

同境町二丁目公園地前
西洋小間物御引取店　近江屋榮助

附言　御仲間の御方は公園地前引取店へ御來車被下度各商館へ取引は深切に精々勉強仕候

發兌
十月。五日　十九日　廿六日
十一月。二日　九日　十六日　廿三日　三十日
十二月。七日　十四日　廿一日　廿八日

定價
一册。六錢　郵稅。五厘　（但府內無郵稅）
十册。五十八錢郵稅。五錢　（同前）
半年分　一圓四十三錢　府外は　一圓五十六錢
一年分　二圓六十錢　府外は　二圓八十六錢

廣告
特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を掲載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む
一行（廿七字詰）一回　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌ハ今後女學校又ハ婦人會杯ヨリ毎發兌十册以上一纏ニ御注文ノ向ヘハ別ニ十册毎ニ一册ハ無代ニテ進呈可仕候

明治二十二年十月廿四日印刷
明治二十二年十月廿六日發兌

發行所　東京麴町區富士見町二丁目一番地　女學雜誌社
編輯兼發行者　東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留　嚴本善治
印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.
"JOGAKU ZASSHI."
Price 6 *sen*. By post *yen* 1.56 six month; *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 1B. FUJIMICHO 2CHYOME, KOJIMACHI, Tôkyô, Japan.